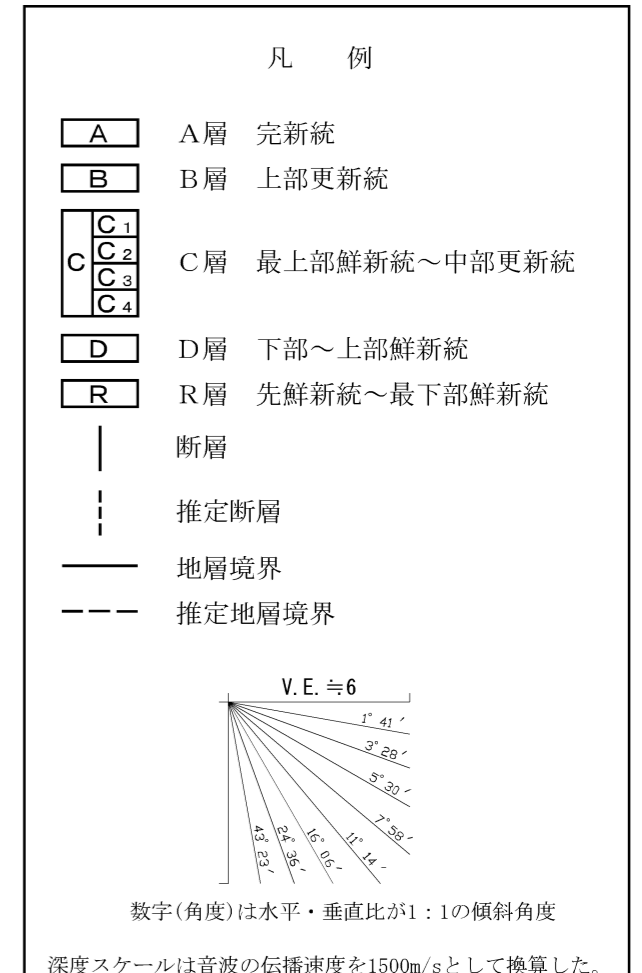
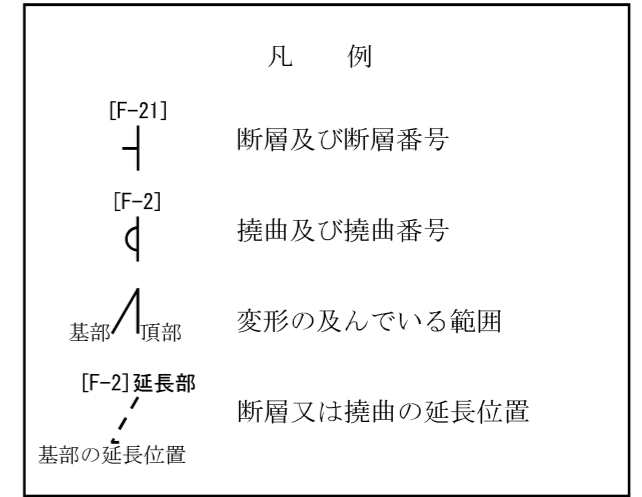
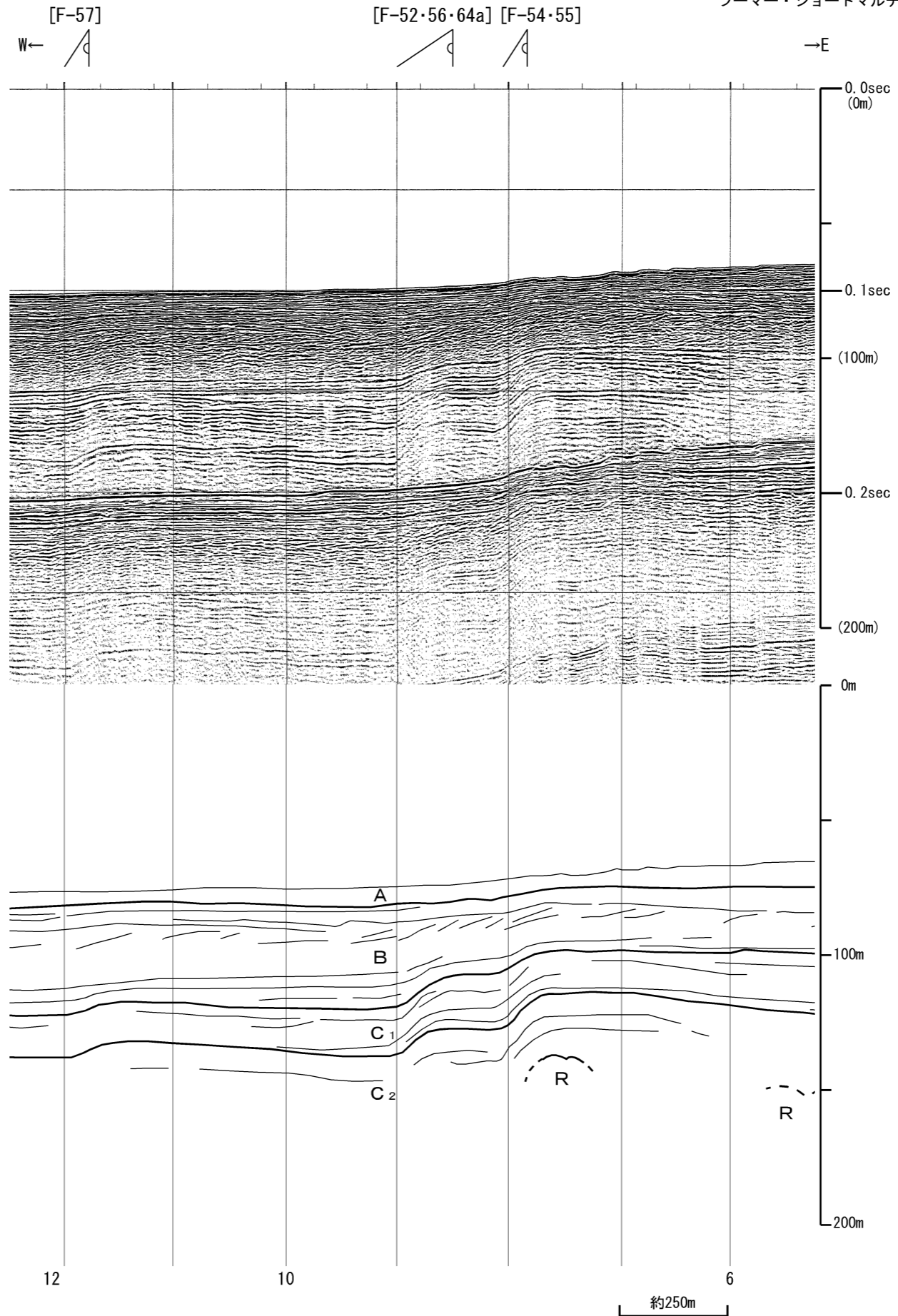


第1.2.3.2.13図(8) C断層の海上音波探査記録及び地質断面図 (No.32-1G)

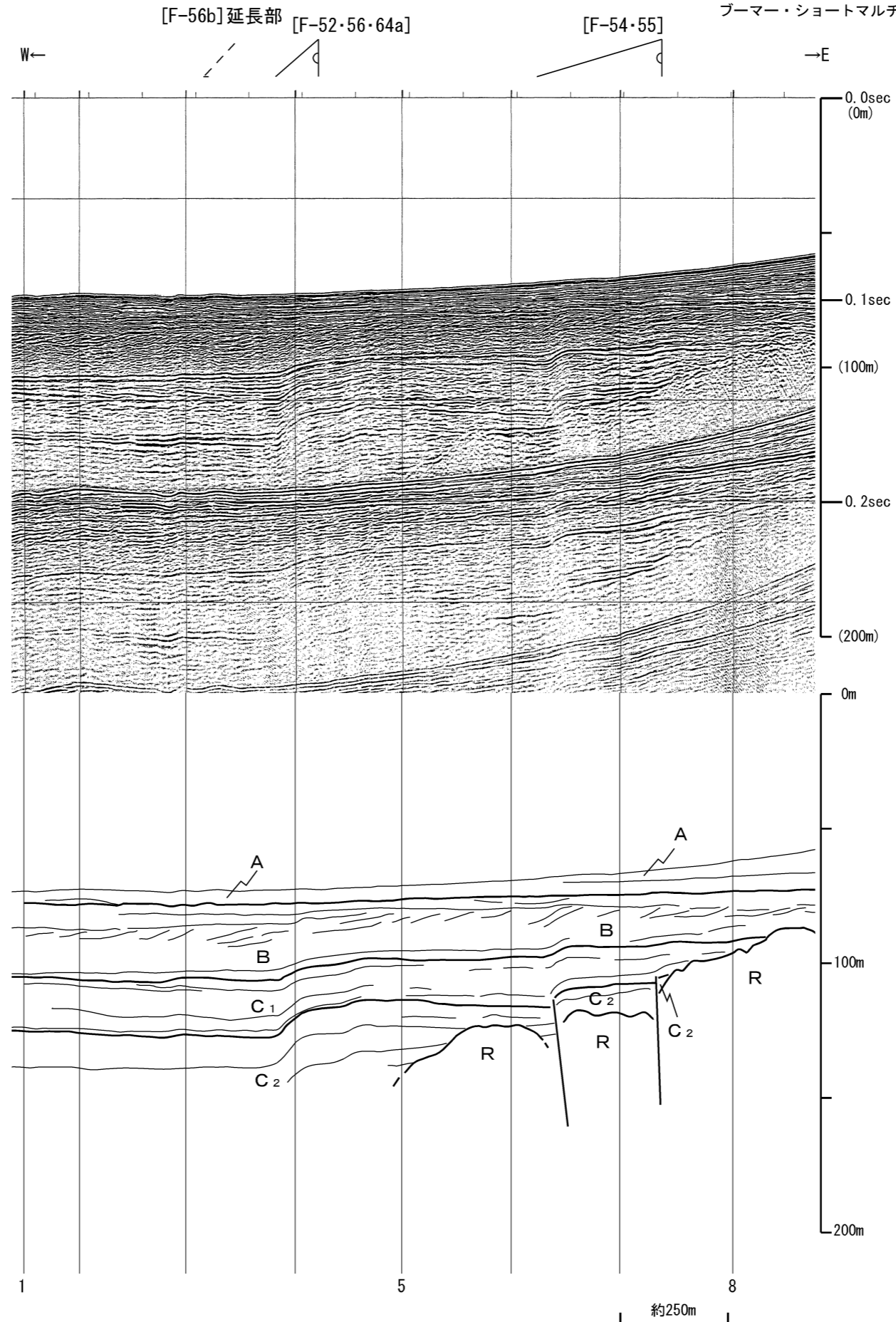
NGGM1

日本原電2005

ブーマー・ショートマルチ



第1.2.3.2.13図(9) C断層の海上音波探査記録及び地質断面図 (NGGM1)



凡 例

| | |
|----------|-------------|
| [F-21] | 断層及び断層番号 |
| [F-2] | 撓曲及び撓曲番号 |
| 基部 頂部 | 変形の及んでいる範囲 |
| [F-2]延長部 | 断層又は撓曲の延長位置 |
| 基部の延長位置 | |

凡 例

| | |
|--|-----------------|
| A | A層 完新統 |
| B | B層 上部更新統 |
| C ₁ C ₂ C ₃ C ₄ | C層 最上部鮮新統～中部更新統 |
| D | D層 下部～上部鮮新統 |
| R | R層 先鮮新統～最下部鮮新統 |
| | 断層 |
| - - - | 推定断層 |
| — | 地層境界 |
| - - - | 推定地層境界 |

V. E. ≒ 6

1° 41' 30"

3° 28' 30"

5° 30' 00"

7° 58' 30"

11° 14' 30"

16° 06' 00"

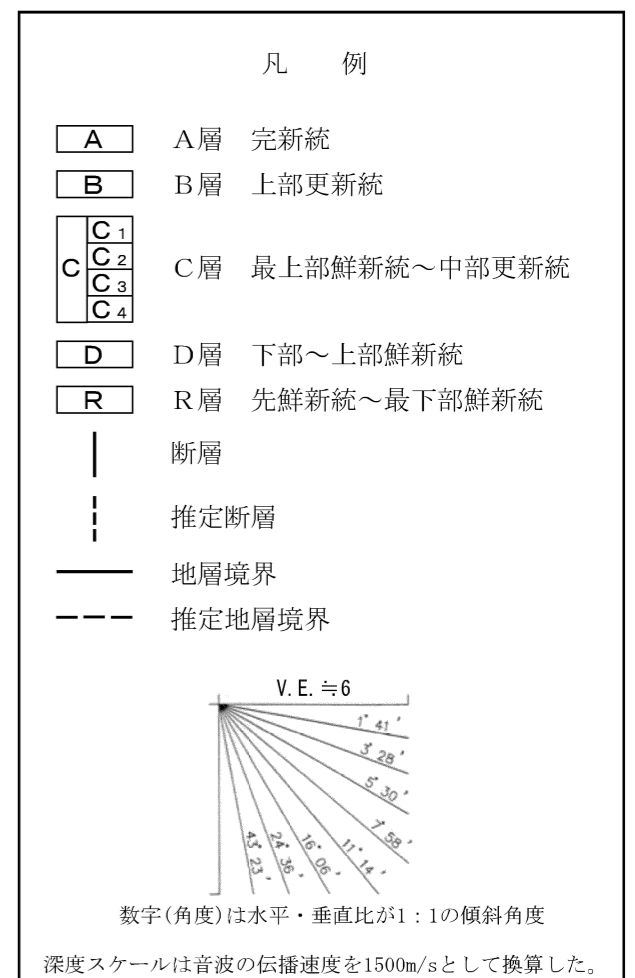
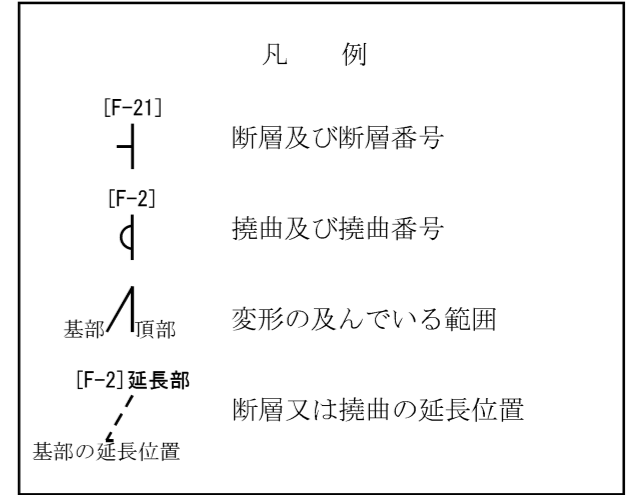
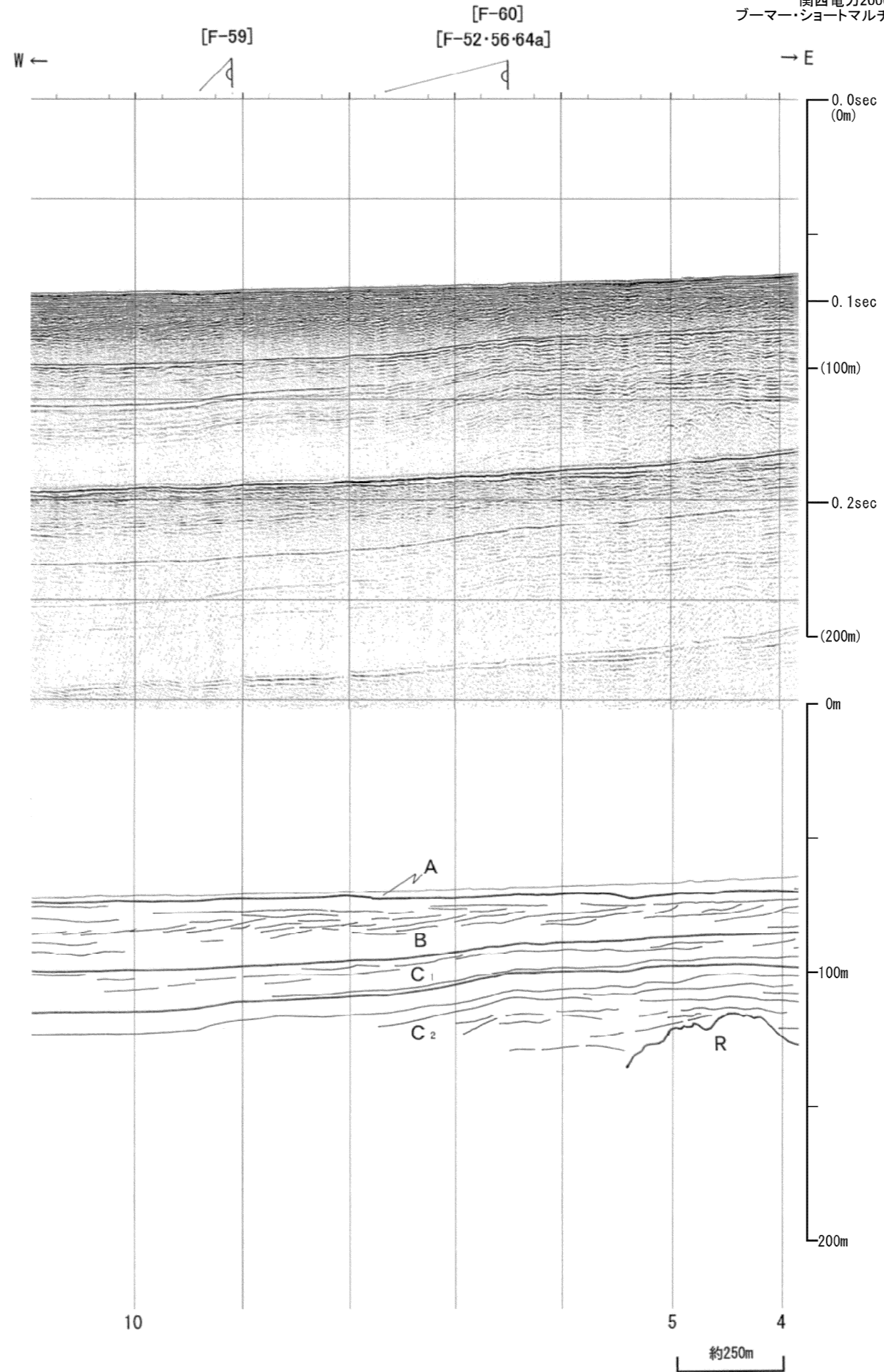
24° 36' 00"

43° 23' 00"

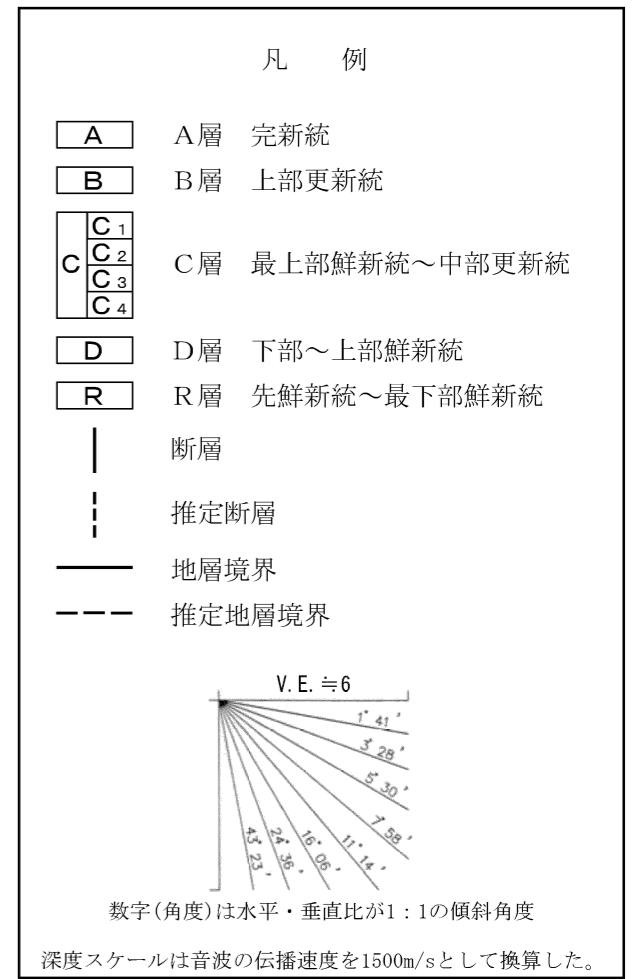
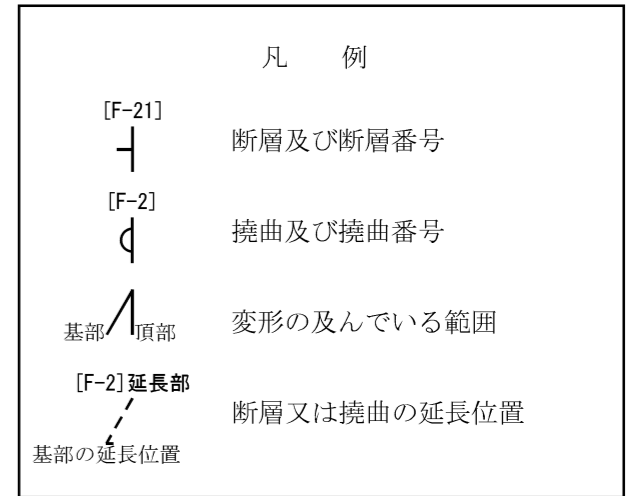
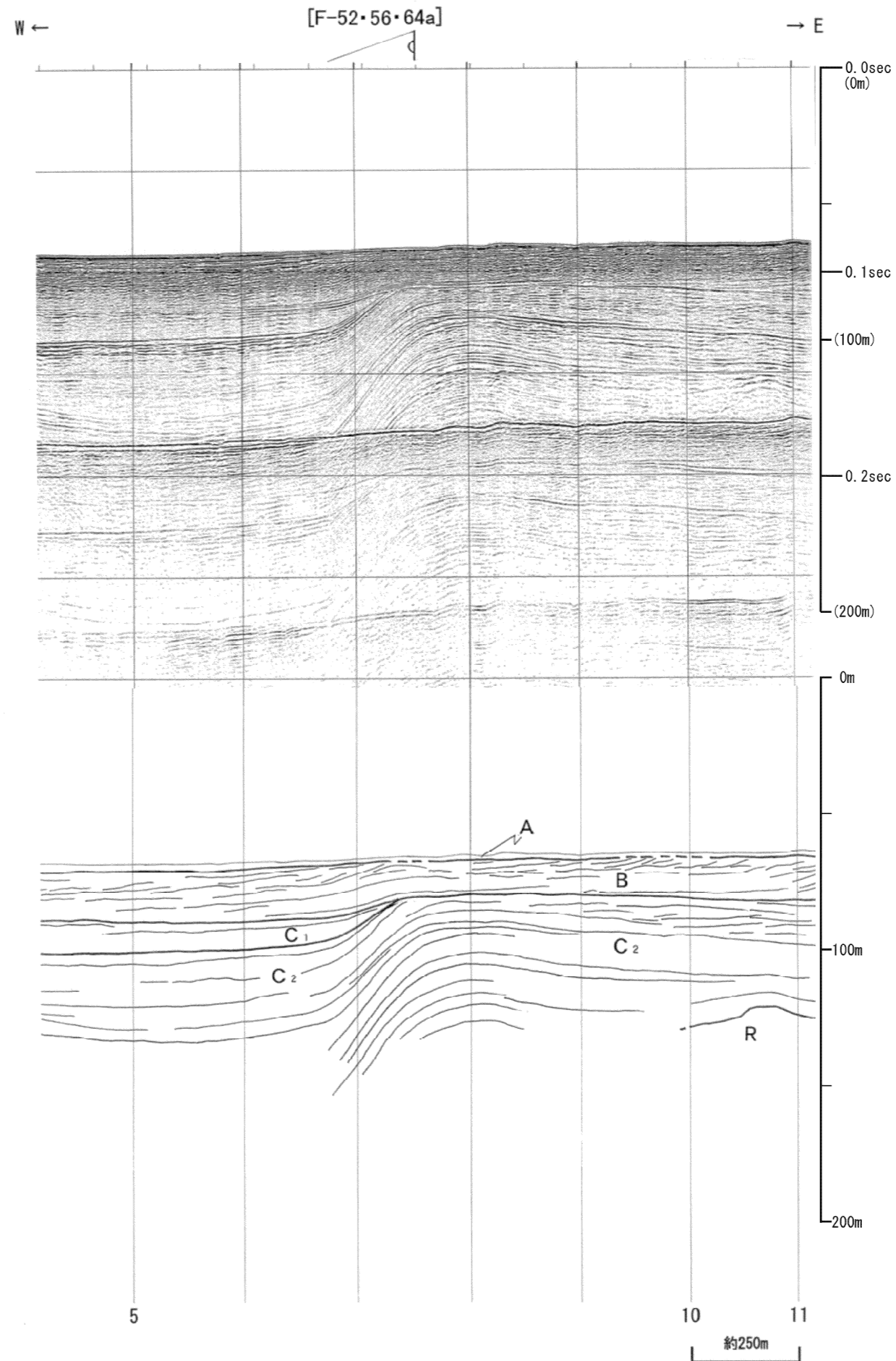
数字(角度)は水平・垂直比が1:1の傾斜角度

深度スケールは音波の伝播速度を1500m/sとして換算した。

第1.2.3.2.13図(10) C断層の海上音波探査記録及び地質断面図 (NGGM3-1)



第1.2.3.2.13図(11) C断層の海上音波探査記録及び地質断面図 (No.35G)



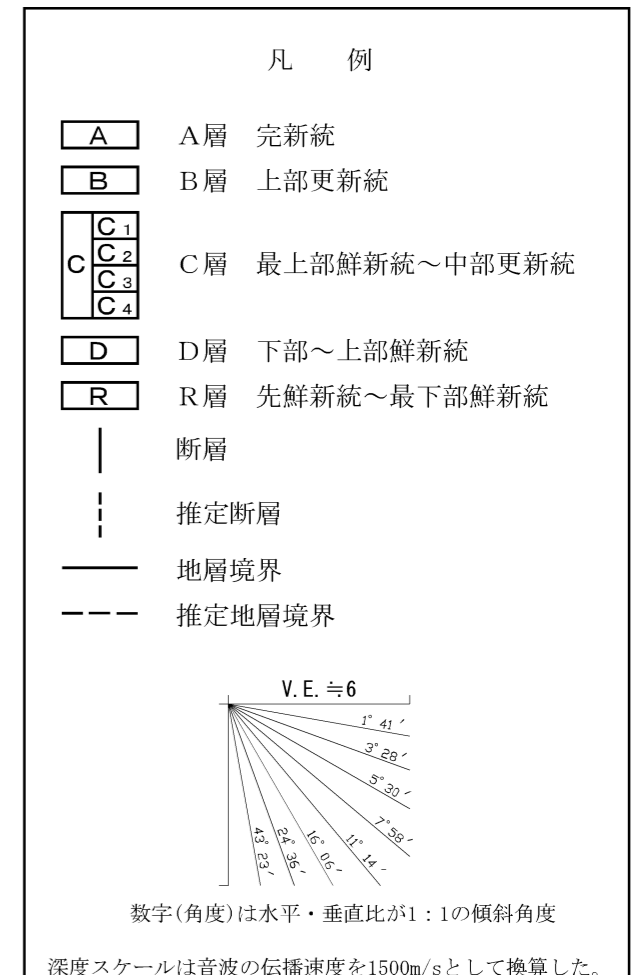
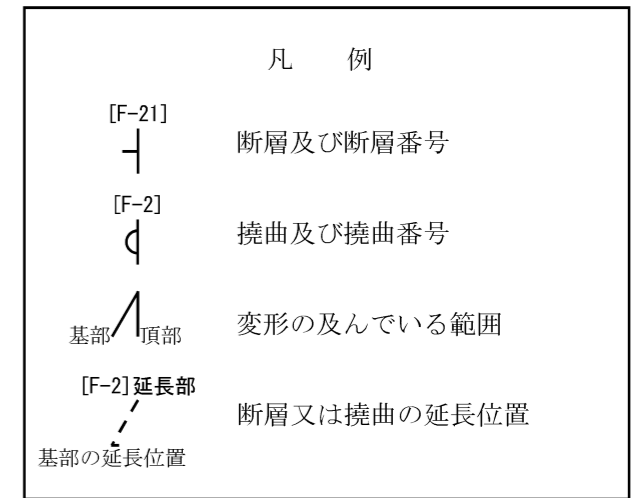
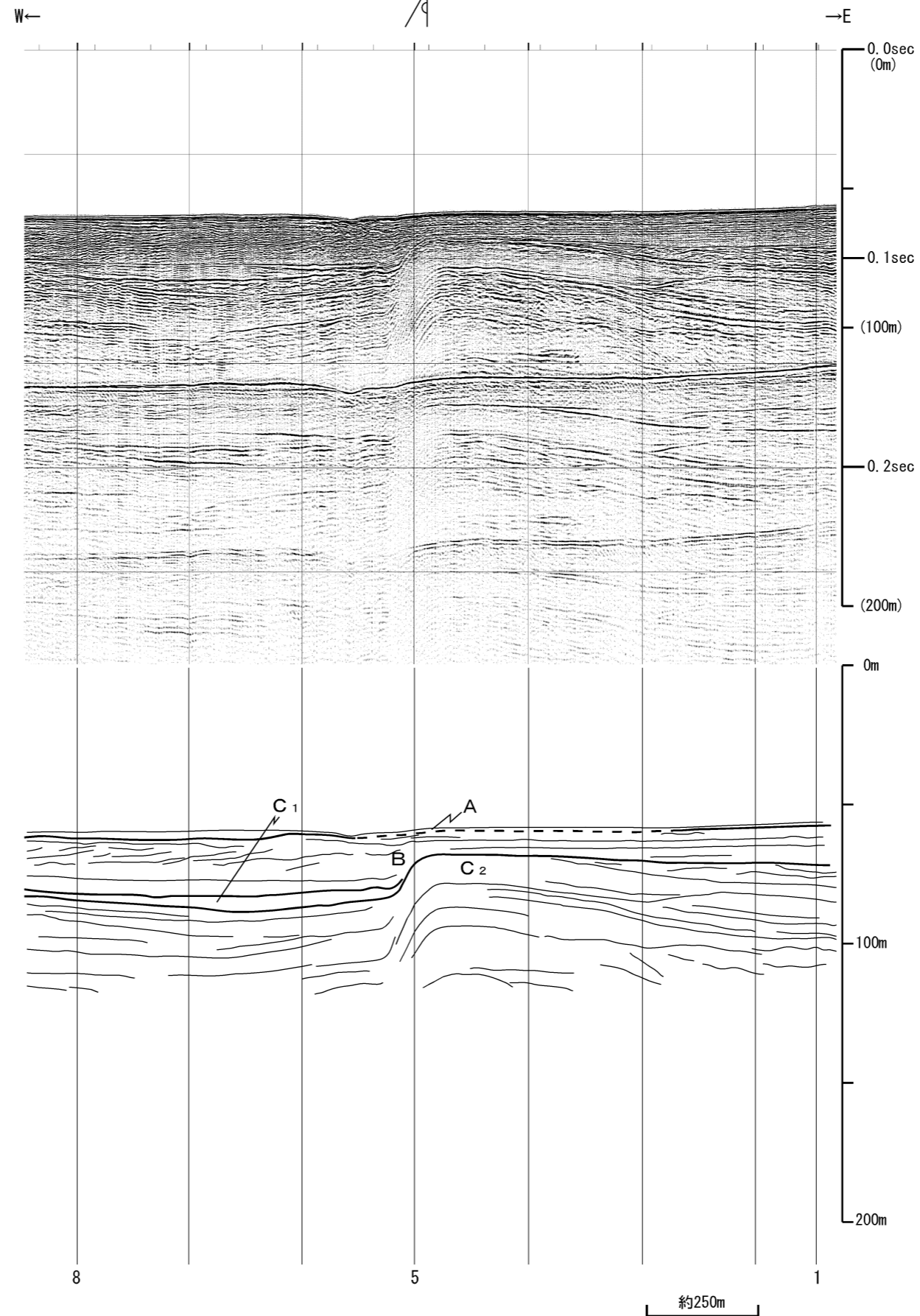
第1.2.3.2.13図(12) C断層の海上音波探査記録及び地質断面図 (No.37-2G)

No. 39G

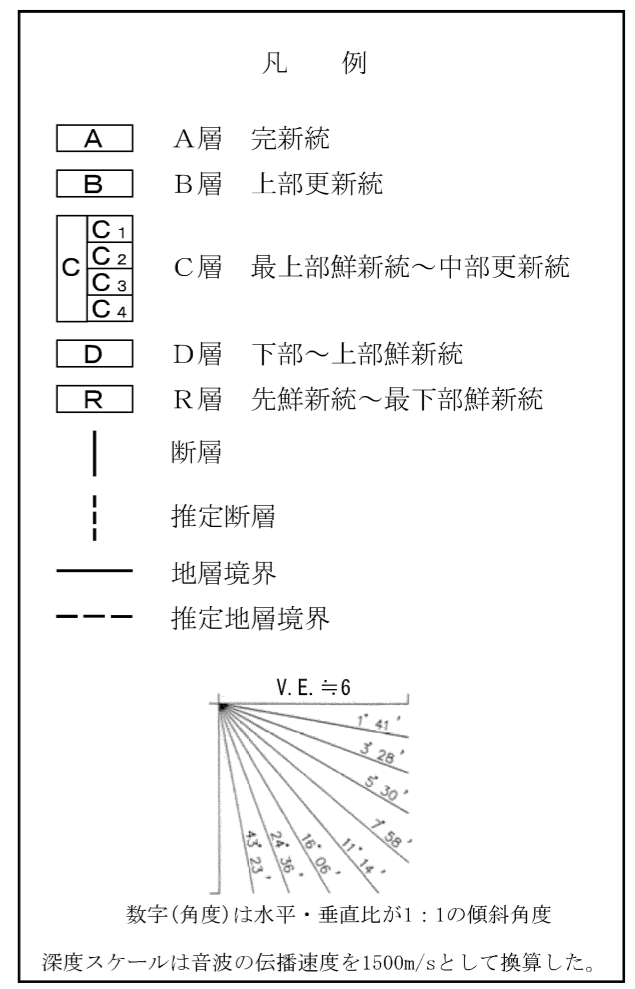
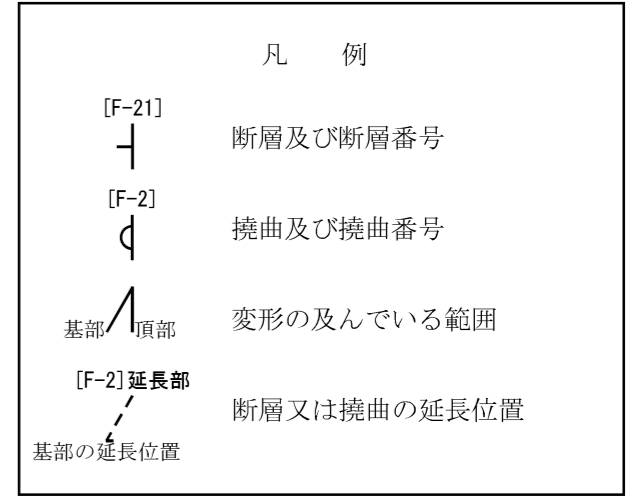
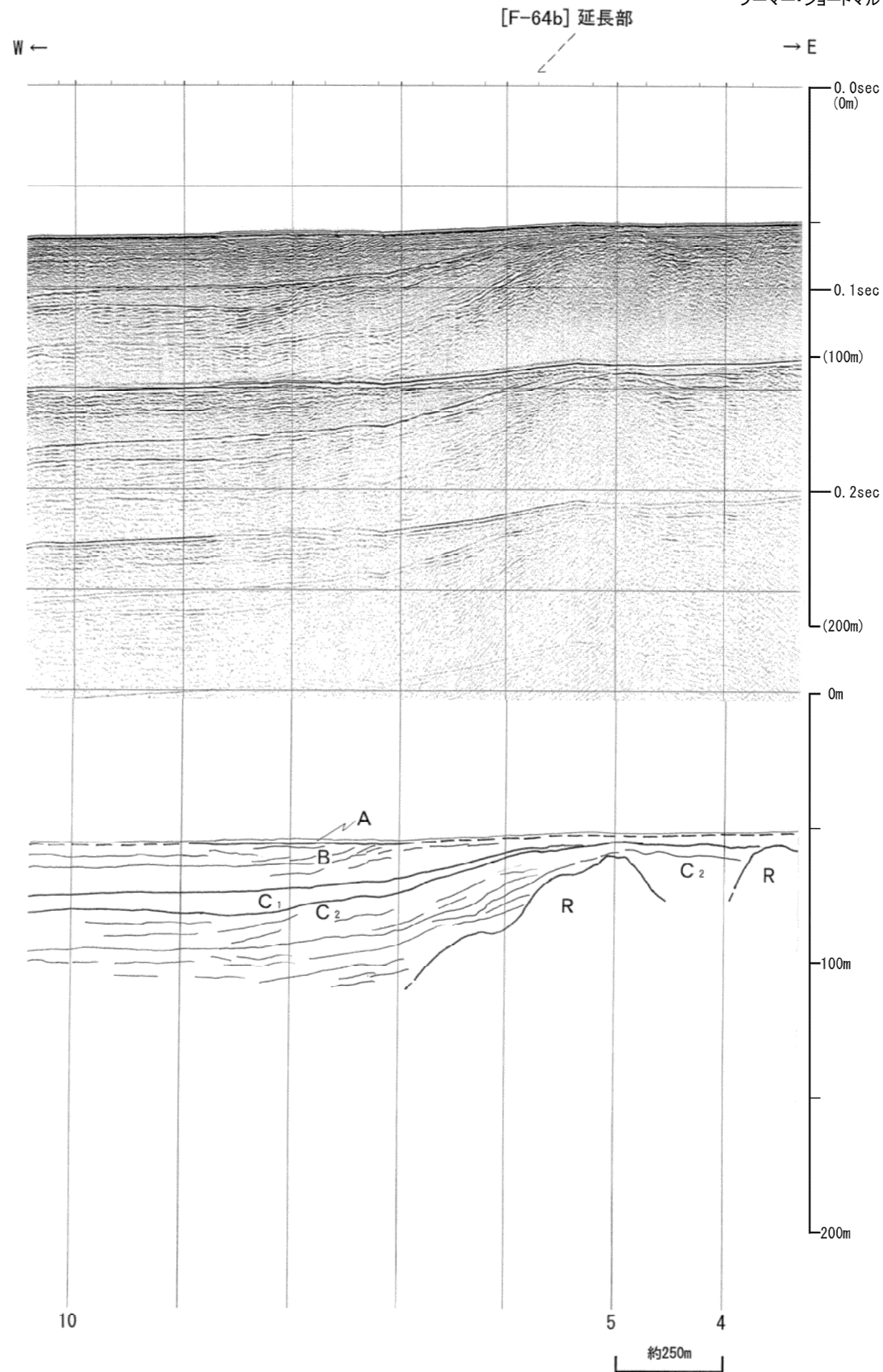
関西電力2006

ブーマー・ショートマルチ

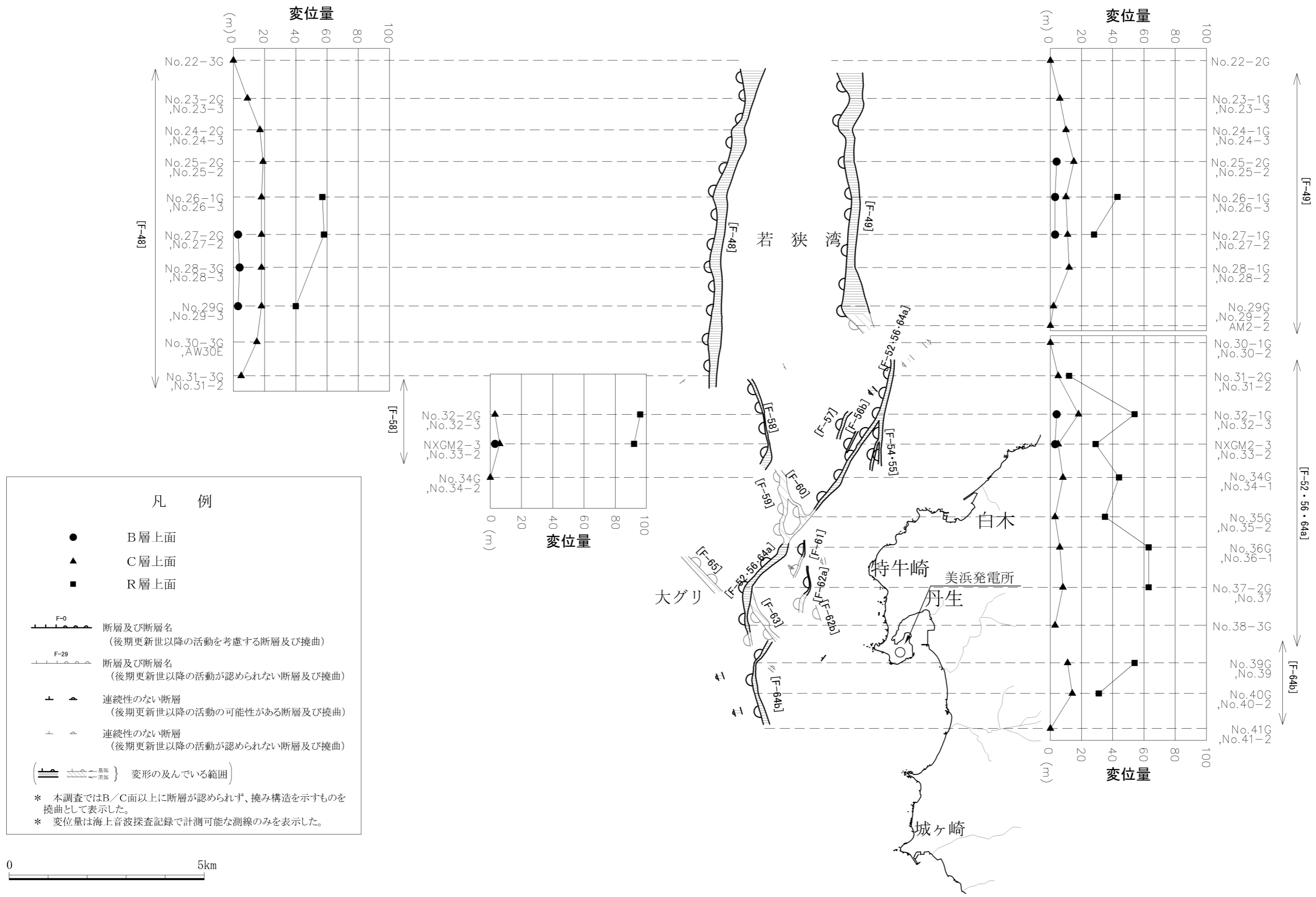
[F-64b]



第1.2.3.2.13図(13) C断層の海上音波探査記録及び地質断面図 (No.39G)








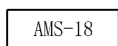
第1.2.3.2.13図(14) C断層の海上音波探査記録及び地質断面図 (No.41G)

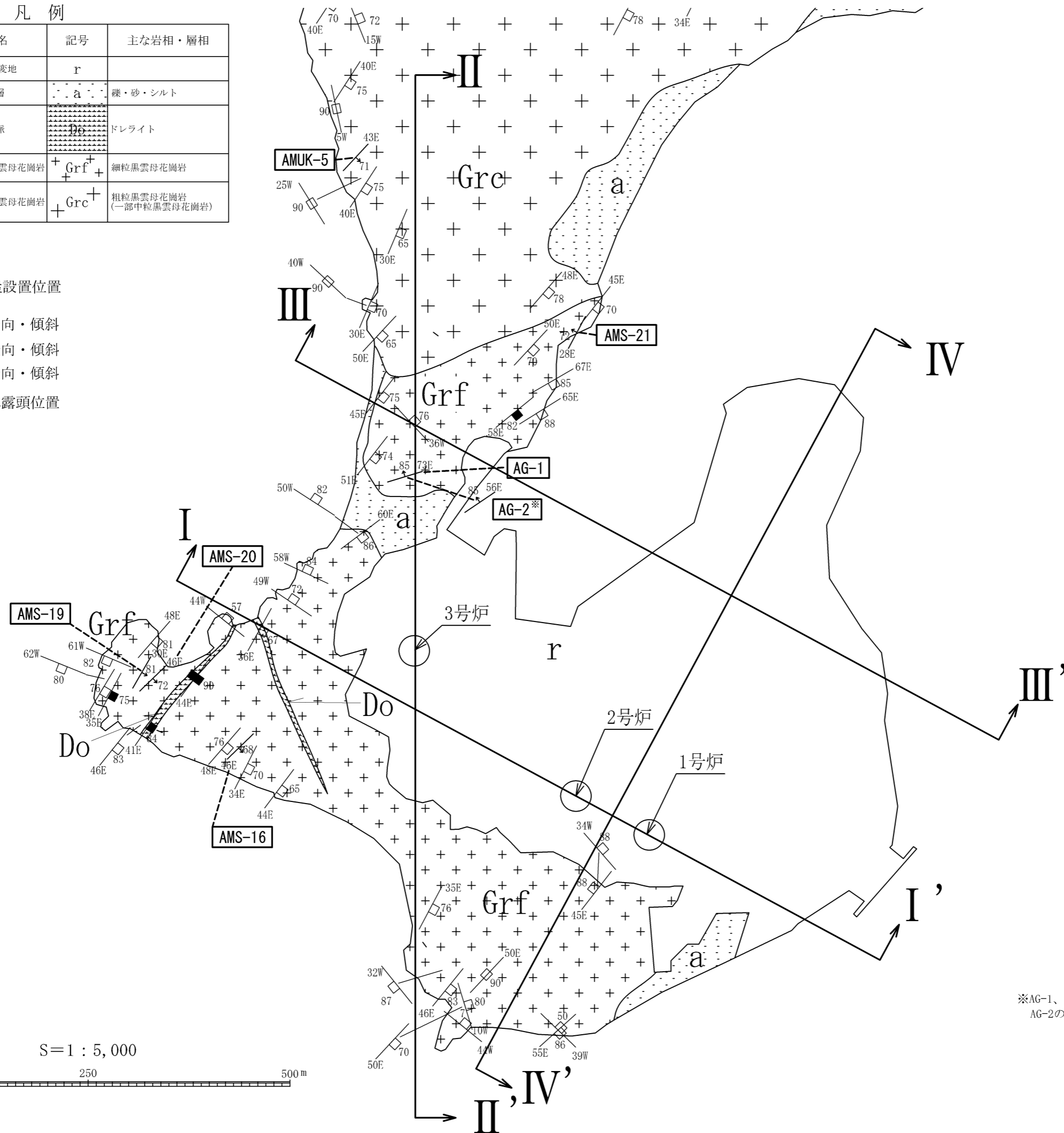
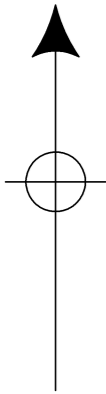


第1.2.3.2.14図 C断層の変位量分布図

凡例

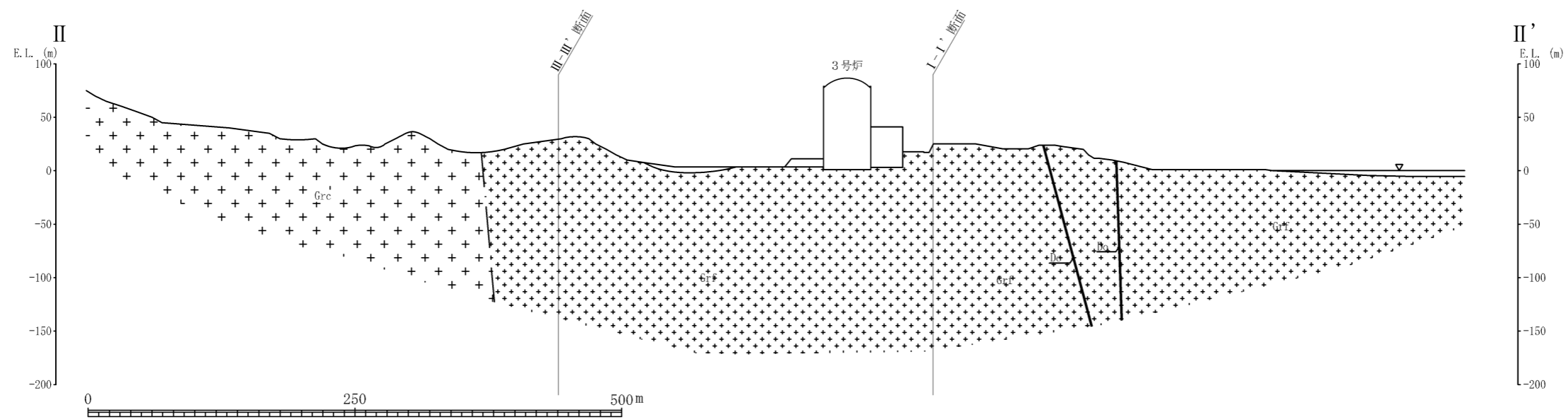
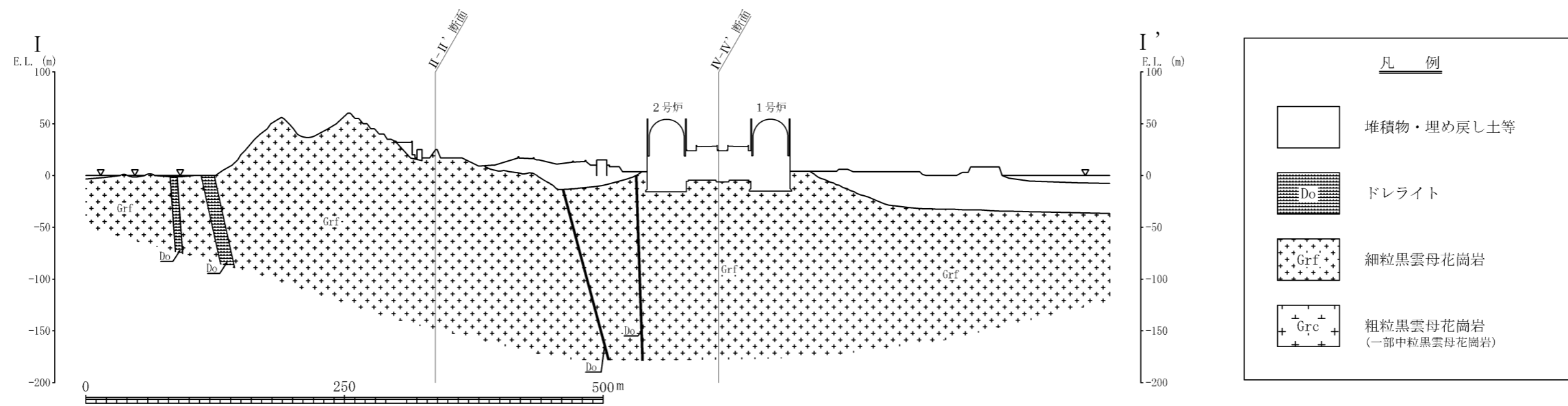
| 地質年代 | | 地層名 | 記号 | 主な岩相・層相 |
|-------------|-------|----------|-----|--------------------------|
| 新 生 代 | 第四紀 | 人工改変地 | r | |
| | 完新世 | 沖積層 | a | 礫・砂・シルト |
| 新 生 代 | 新第三紀 | 岩脈 | Do | ドレライト |
| | 古第三紀 | 江岩花崗岩 | Grf | 細粒黒雲母花崗岩 |
| 中 生 代 | 白亜紀後期 | 粗粒黒雲母花崗岩 | Grc | 粗粒黒雲母花崗岩 (一部中粒黒雲母花崗岩) |

-  断面位置
-  原子炉建屋設置位置
-  節理面の走向・傾斜
-  断層面の走向・傾斜
-  貫入面の走向・傾斜
-  破砕部確認露頭位置

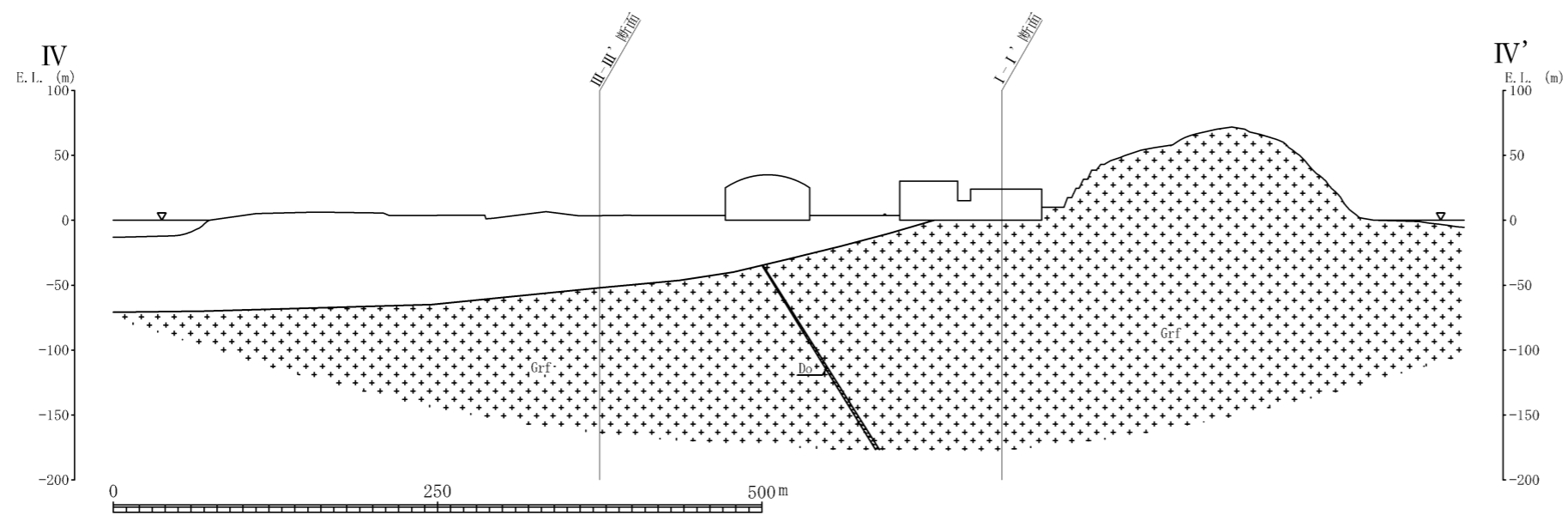
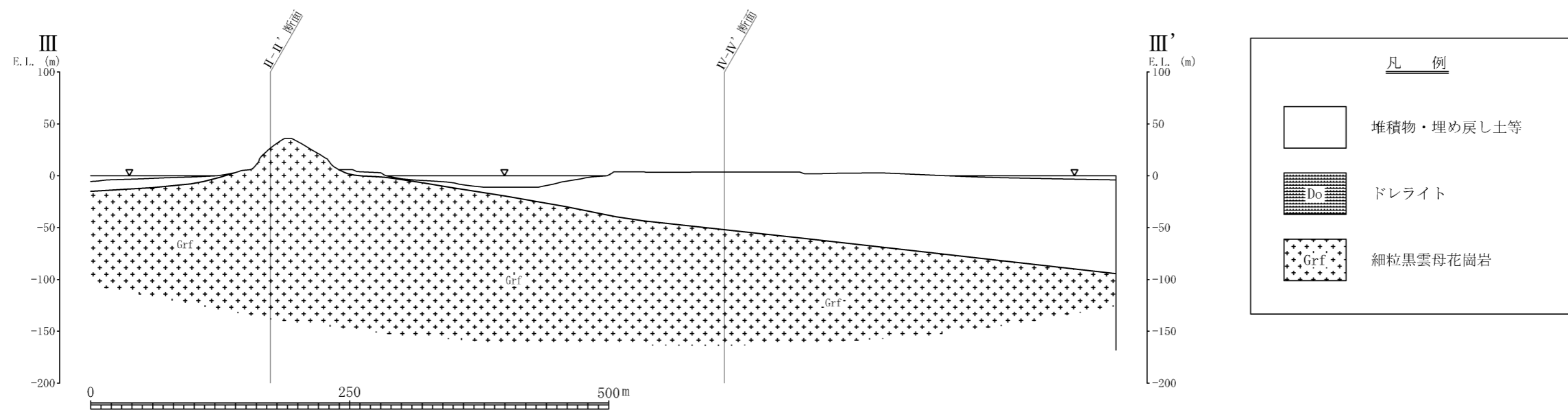


※AG-1、AG-2については、確認場所が近いことから、AG-2の走向傾斜を引き出して記載。

第1.2.3.3.1図 敷地の地質図



第1.2.3.3.2図(1) 敷地の地質断面図(1)



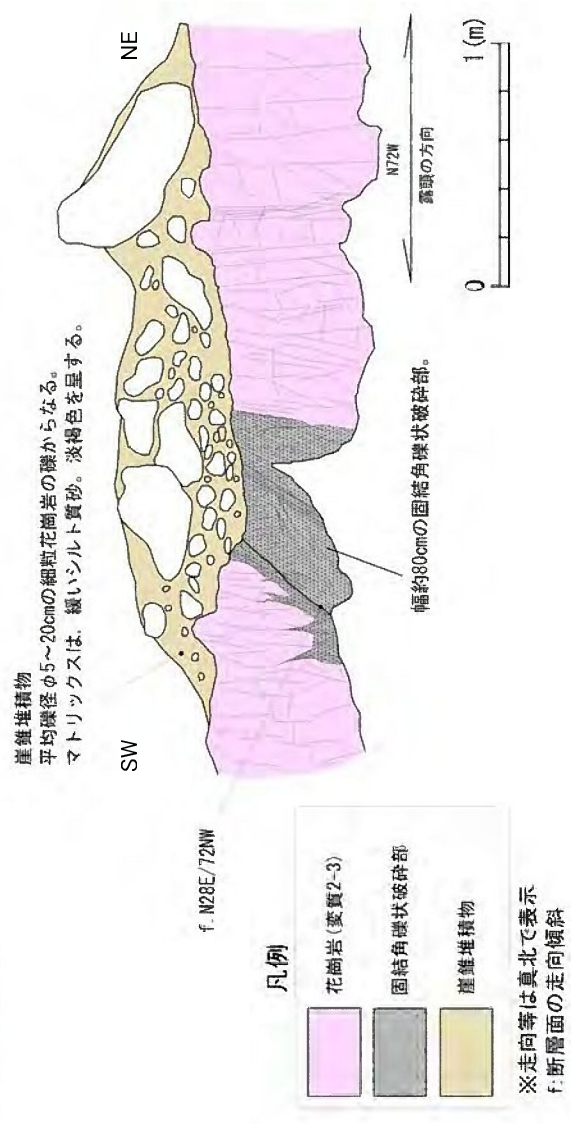
第1.2.3.3.2図(2) 敷地の地質断面図(2)

3号炉北東方の露頭(AMS-21)



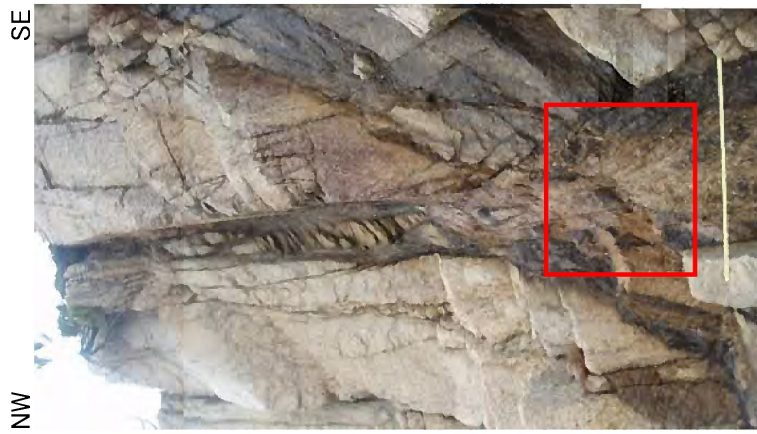
全景写真

幅80cm程度の固結した角礫状破砕部。
 走向・傾斜:N28E/72NW。
 破砕部を覆う礫層に変位・変形は認められない。



第1.2.3.3.3図 3号炉北東方の露頭(AMS-21)の写真及びスケッチ

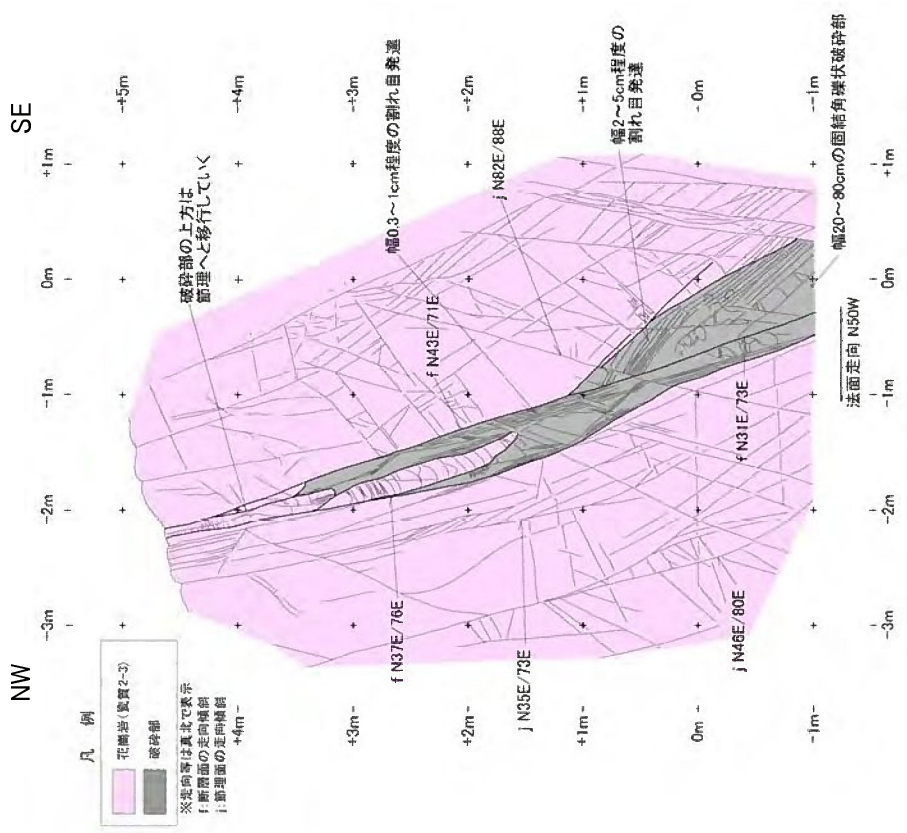
3号炉北方の露頭 (AMUK-5)



全景写真



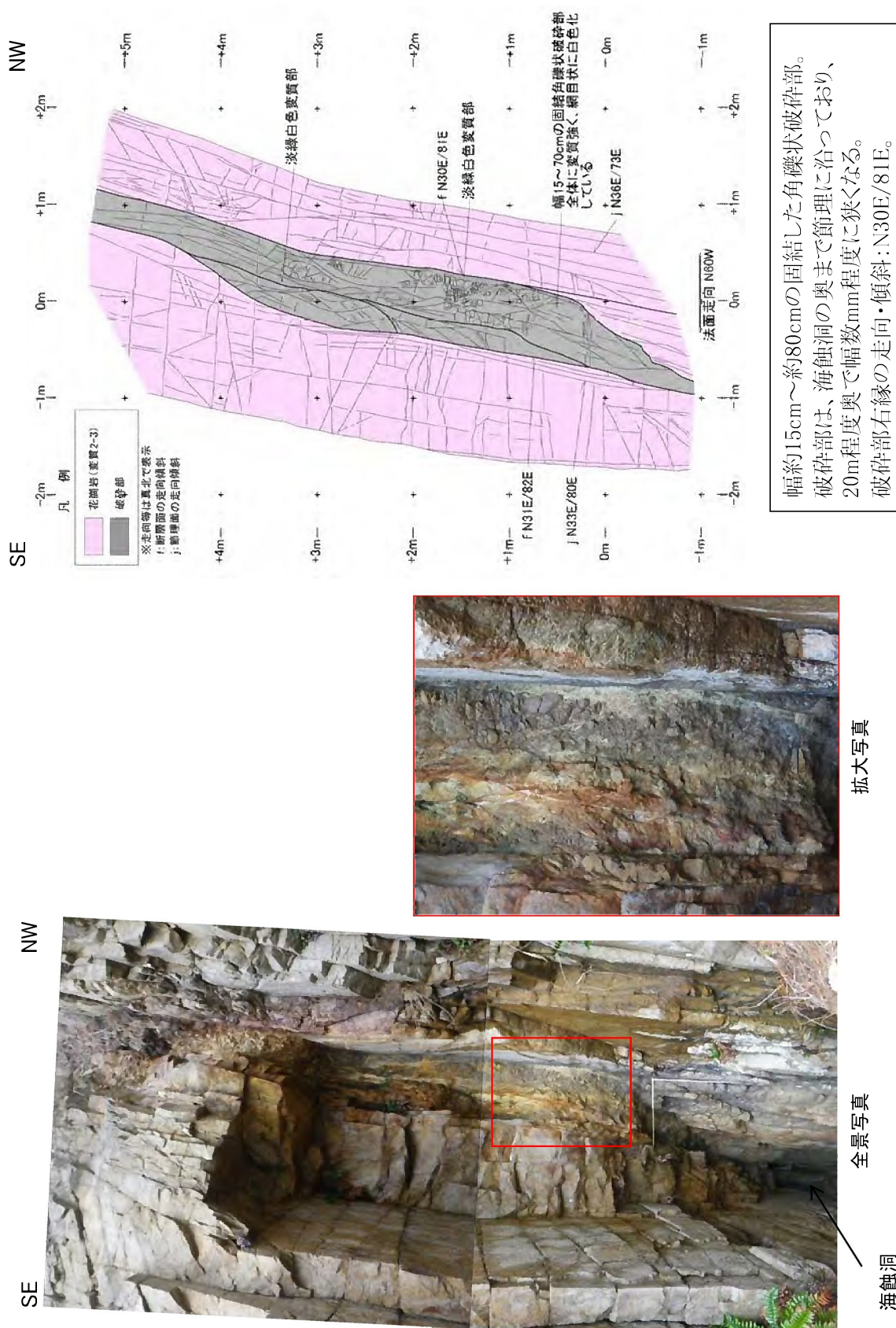
拡大写真



幅20cm～80cmの固結した角礫状破砕部。連続性に富む主断層面は認められない。破砕部右縁の走向・傾斜：N43E/71SE。上方では、節理に移行していく。

第1.2.3.3.4図 3号炉北方の露頭 (AMUK-5) の写真及びスケッチ

3号炉西方の露頭 (AMS-19)



第1.2.3.3.5図 3号炉西方の露頭 (AMS-19) の写真及びスケッチ

3号炉西方の露頭(AMS-20)



幅0.2cm~40cmの固結した角礫状破砕部。全体に風化進む。破砕部左縁の走向・傾斜：N46E/72E。上部および下部の岩盤中で幅が狭くなり、下部では0.2cm~2cm程度の固結砂状破砕部に移行する。



上部拡大写真



下部拡大写真



全景写真

第1.2.3.3.6図 3号炉西方の露頭 (AMS-20) の写真及びスケッチ

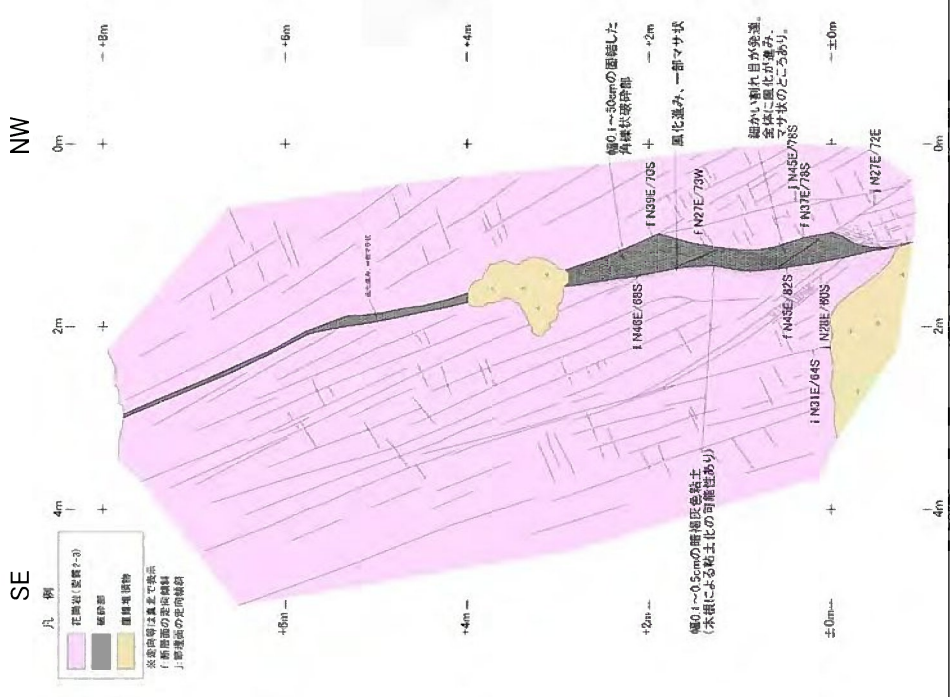
3号炉南西方の露頭 (AMS-16)



全景写真

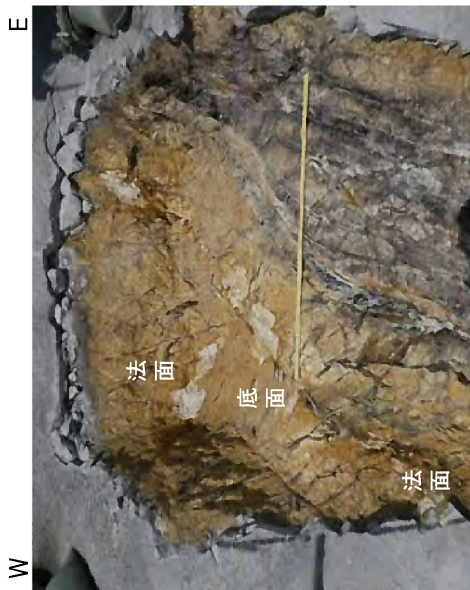


拡大写真

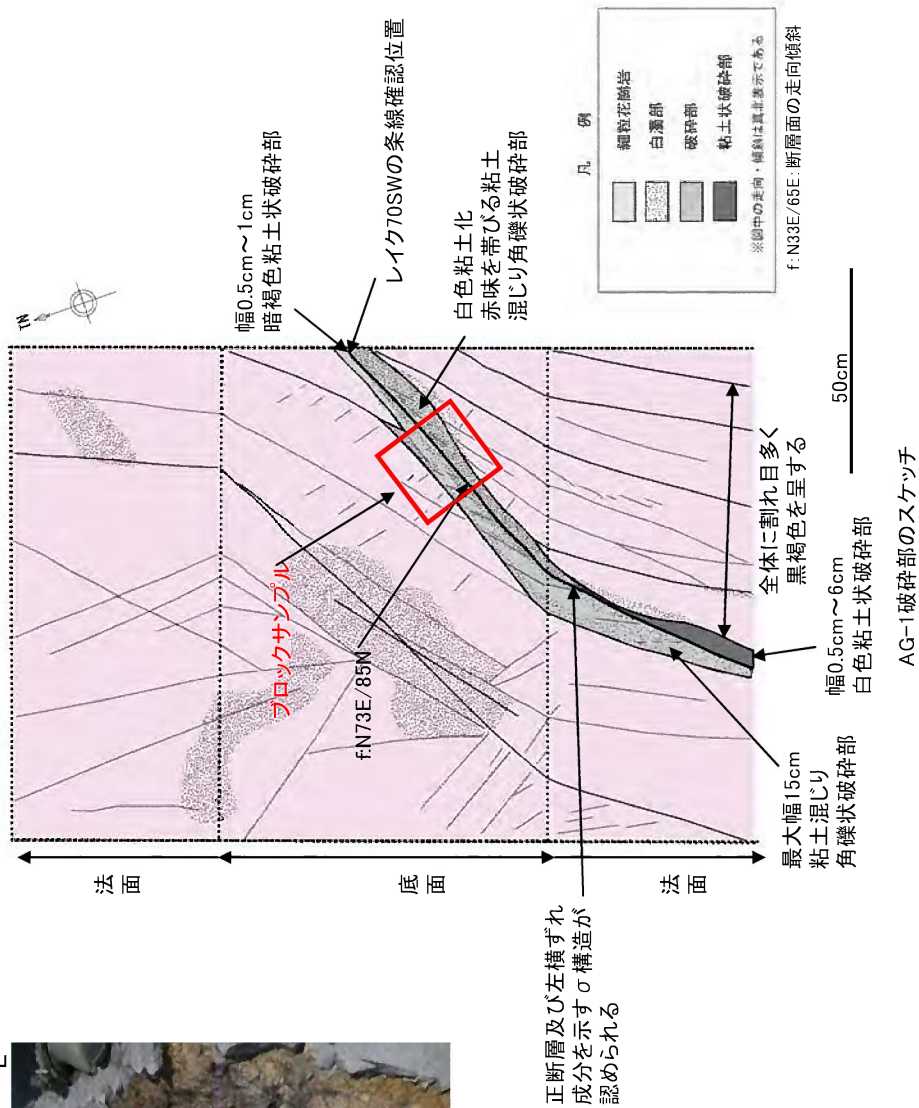


幅0.1cm～50cmの固結した角礫状破砕部。
 左縁に沿って幅0.1cm～0.5cmの暗褐色粘土を伴う(左拡大写真)。
 走向・傾斜:N46E/68S。
 破砕部の上方はN30E方向の節理に沿って分布し、節理に移行していく。
 下方も節理に沿って幅が狭くなる。

第1.2.3.3.7図 3号炉南西方の露頭 (AMS-16) の写真及びスケッチ



AG-1破砕部の写真



AG-1破砕部の性状
 走向傾斜はN73E/85N。
 破砕幅は7cm~15cm、粘土状破砕部と粘土混じり角礫状破砕部からなる。
 露頭観察では正断層及び左横ずれ成分を示すσ構造が認められる。
 また、最新面にレイク70SWの条線を確認した。

第1.2.3.3.8図 アゴ越付近の破砕部 (AG-1) の露頭写真及びスケッチ

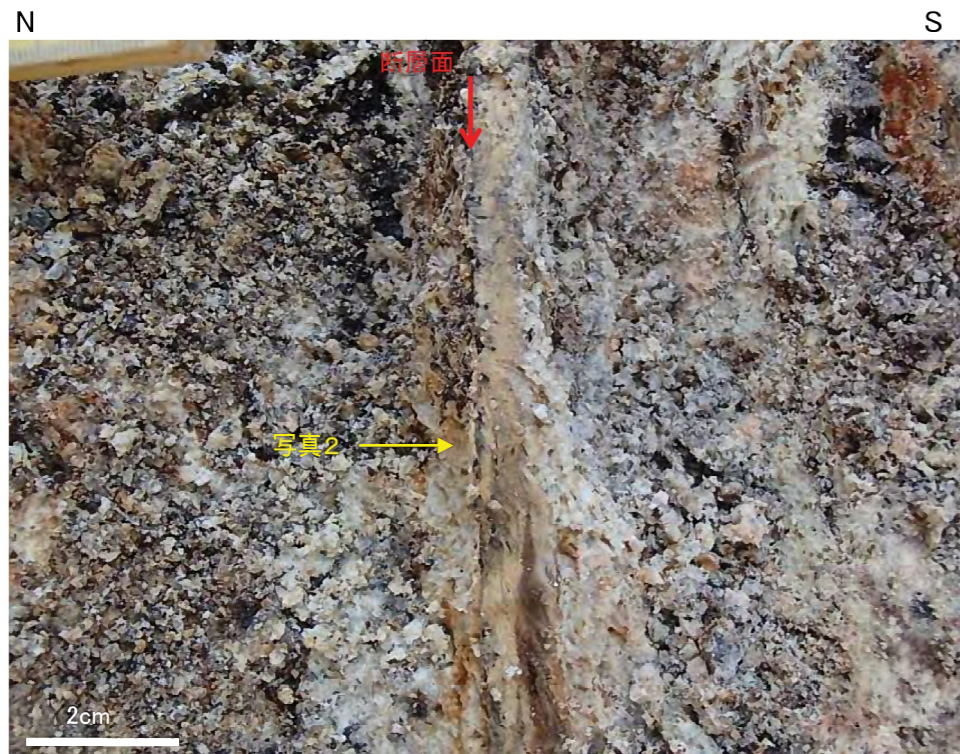
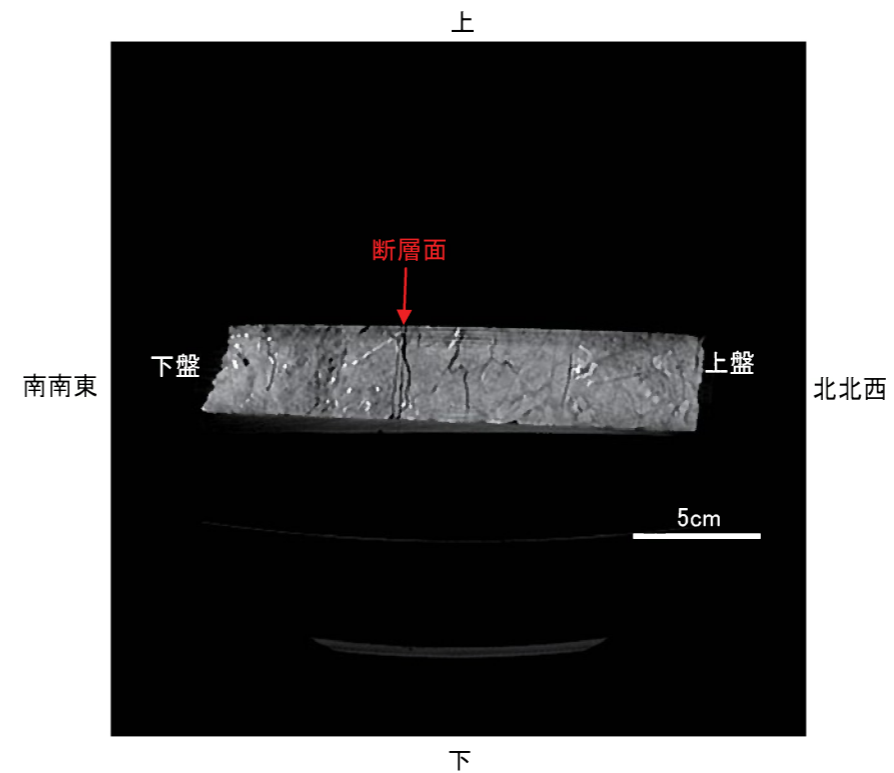


写真1

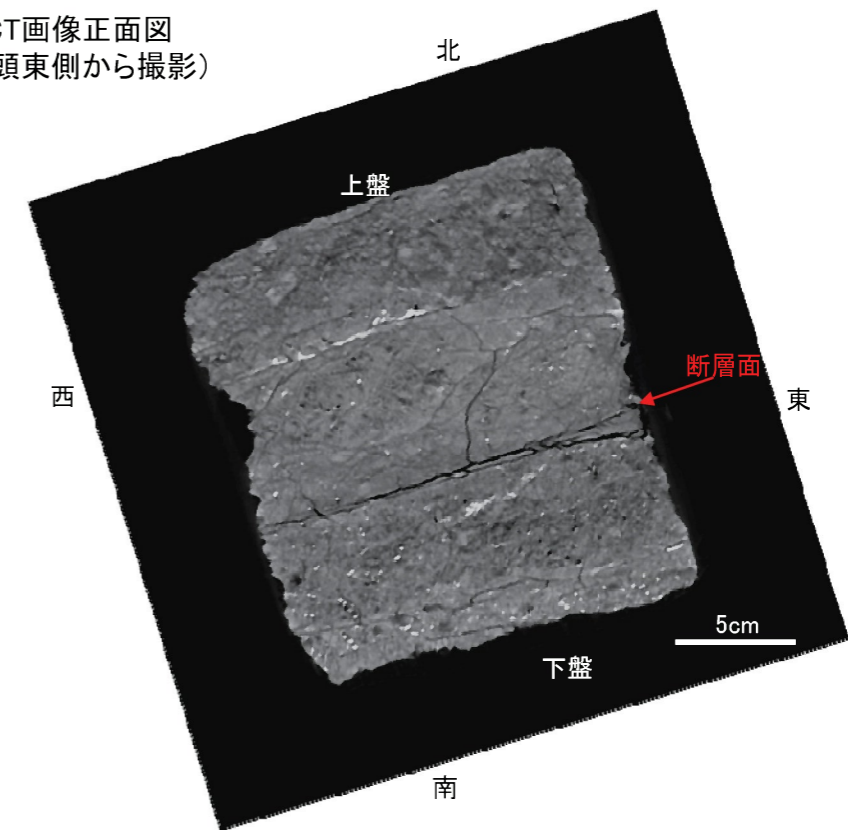


写真2: 断層面上に70SWの条線が認められる。付加ステップの方向から、最新活動の運動センスは左横ずれ正断層である可能性がある。

断層面の走向/傾斜: N73E/85N、縦ずれ成分: 不明、横ずれ成分: 不明。
途切れることなく連続するY面が1条認められた。
さらに、このY面は直線性に優れることから断層面であると考えられる。
明瞭な密度変化は認められない。

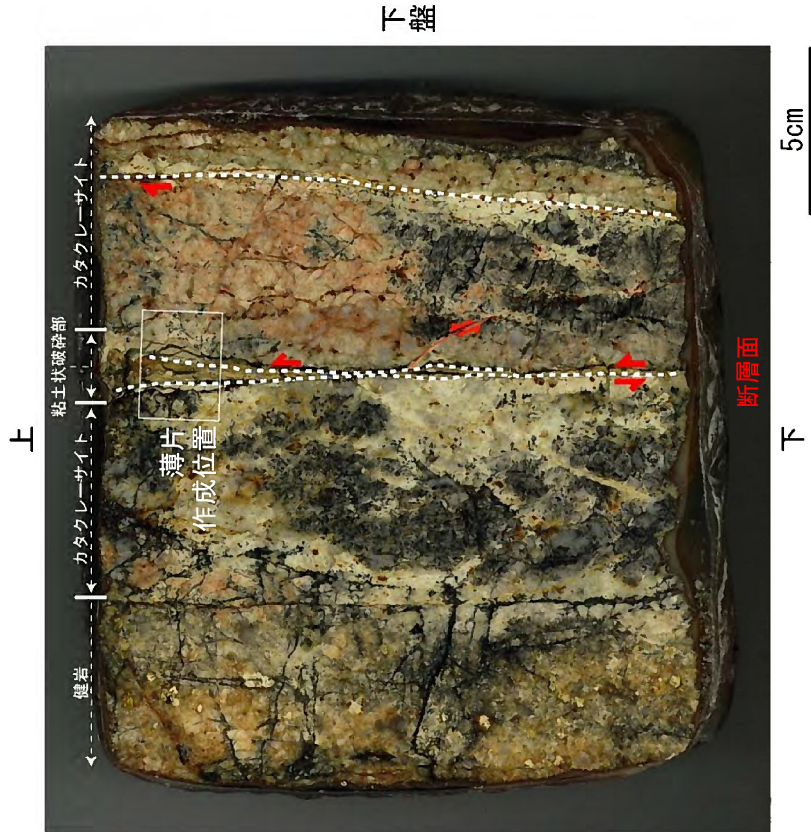


CT画像正面図
(露頭東側から撮影)



CT画像水平図
(露頭を上から撮影)

第1.2.3.3.9図 アゴ越付近の破碎部 (AG-1) のCT画像観察および条線観察結果



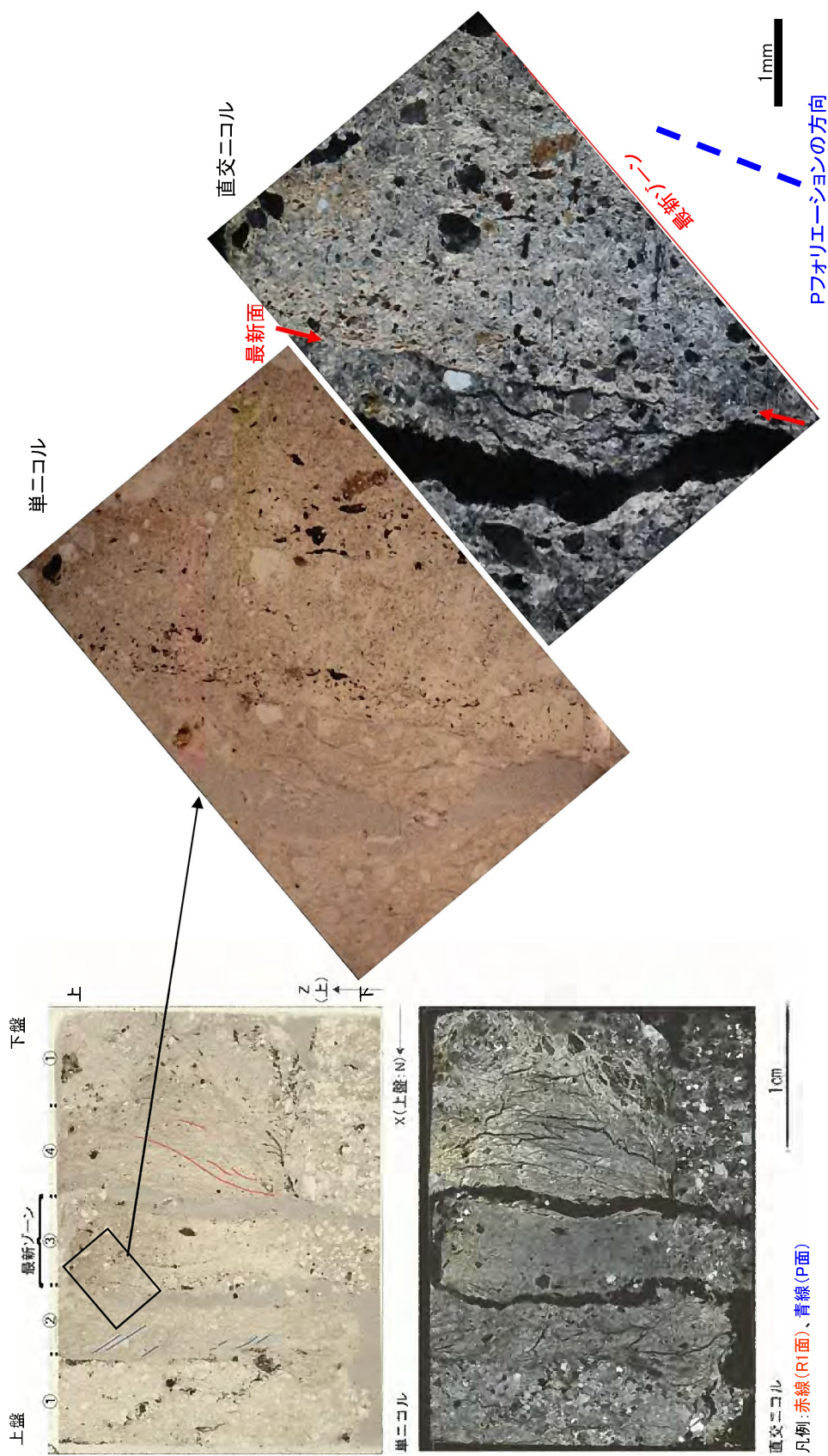
凡例: 白破線 (断層面)、赤線 (R1面)、青線 (P面)



研磨片観察結果

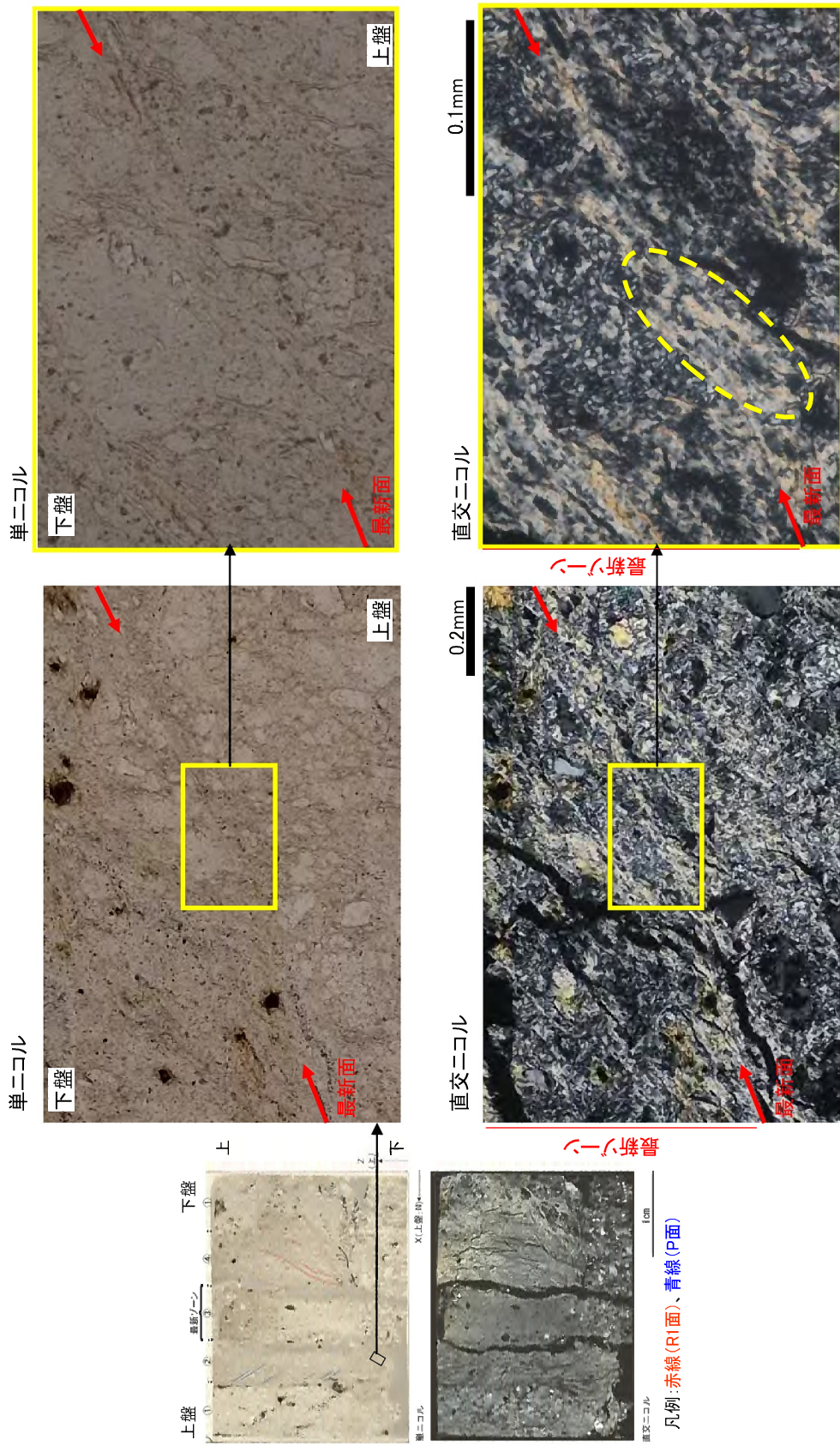
- 分帯: 健岩とカタクレーサイト、粘土状破砕部が認められる。
- 粘土状破砕部に沿って、研磨片を横断するY面が1条認められる。さらに、このY面は直線性に優れることから、断層面であると考えられる。断層面は主に粘土状破砕部と上盤側のカタクレーサイトを境界付け、研磨片上部で粘土状破砕部中を通過する。
- カタクレーサイト中のY面に沿って逆断層成分を示す複合面構造が認められる。さらに、断層面に沿う粘土状破砕部中に左横ずれを伴う正断層センスを示す変形指標が認められる。これらのことから、運動センスが逆断層から左横ずれを伴う正断層に反転した可能性がある。

第1.2.3.3.10図 アゴ越付近の破砕部 (AG-1) の研磨片観察結果



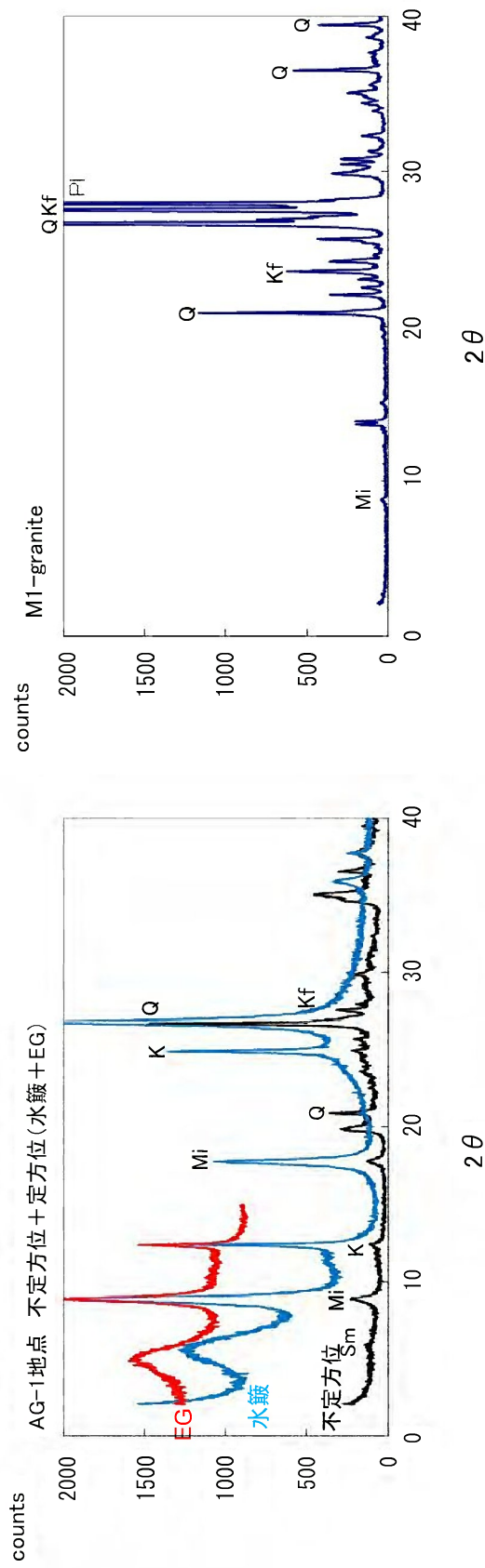
・観察の結果、①カタクレーサイト、②細～中粒粘土状破砕部(細粒破砕物に富む)、③極細粒粘土状破砕部(一部中粒フラグメントを含む)、④細粒粘土状破砕部(③に比べ細粒粘土鉱物が発達、薄片下部で消滅)に分帯される。③が最新ゾーンである。最新面は極細粒粘土状破砕部(③)と細～中粒粘土状破砕部(②)の境界に位置する。最新ゾーンには層状構造が認められない。
 ・最新面に沿って左横ずれを伴う正断層センスを示すPフオリエーションが認められる。
 ・断層の走向傾斜がN73E/85N、条線角度が70SWであることから、最新活動は左横ずれを伴う正断層センスである。

第1.2.3.3.11図(1) アゴ越付近の破砕部 (AG-1) の薄片観察結果(1)



・最新面及びその周辺に粘土鉱物が網目状に発達し、最新面を横断しているものがあり、変形していない。

第1.2.3.3.11図(2) アゴ越付近の破碎部 (AG-1) の薄片観察結果(2)



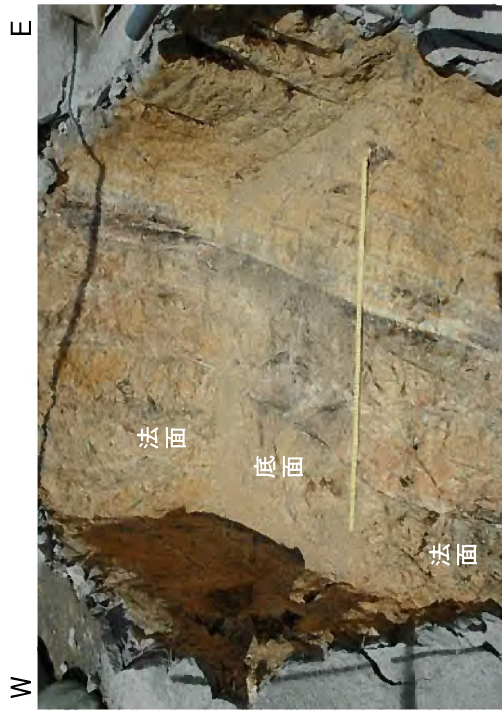
アゴ越(AG-1)破砕部のチャート

新鮮な花崗岩のチャート

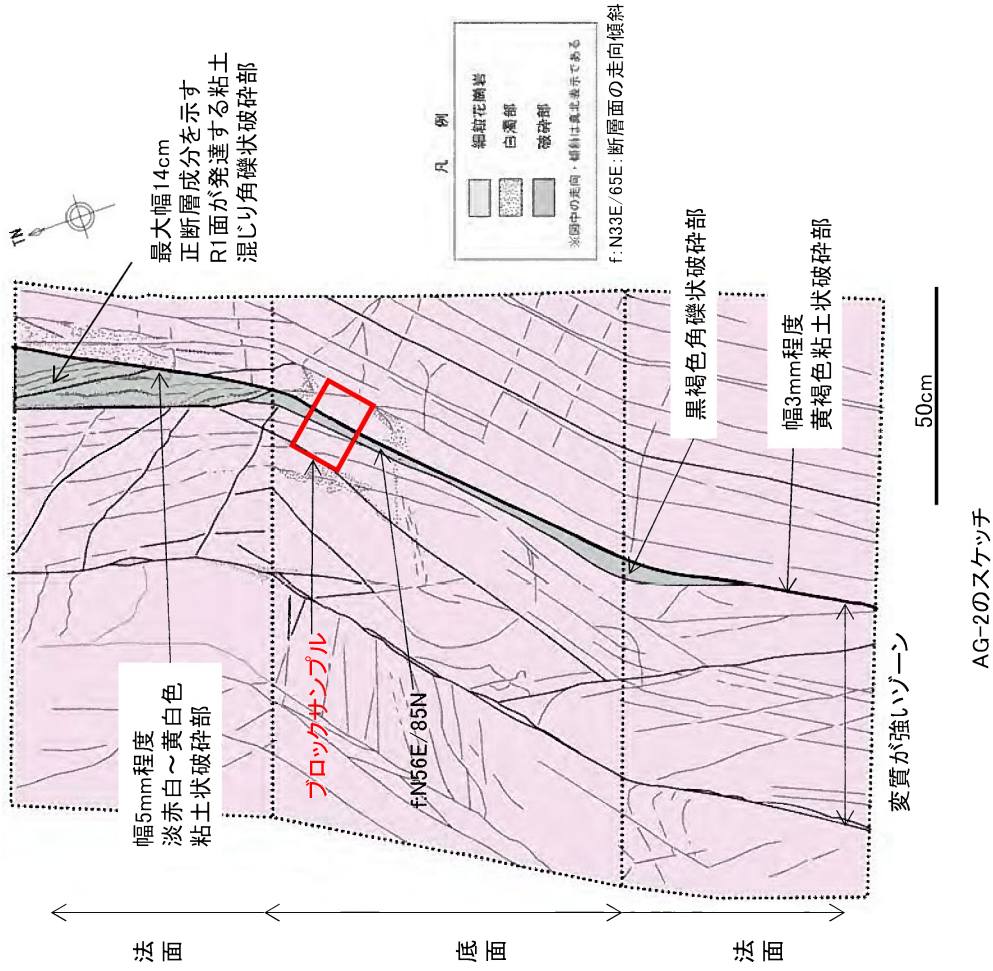
水簾及びEG処理を施した試料の回折パターンは、見やすくするため不定方位の回折パターンの上方にずらして表示した。

- ・AG-1破砕部は、新鮮な花崗岩と比べ斜長石の割合が小さくなっている。
- ・一方、AG-1破砕部はスメクタイト、雲母粘土鉱物、カオリン鉱物が生成している。
- ・よって、AG-1破砕部は熱水変質作用を受けていると判断される。

- 記号凡例
- Q: 石英
 - Pl: 斜長石
 - Kf: カリ長石
 - Sm: スメクタイト
 - Mi: 雲母粘土鉱物
 - K: カオリン鉱物



AG-2の写真



走向傾斜はN56E/85N。
 破砕幅は0.3cm〜14cm、粘土状破砕部と粘土混じり角礫状破砕部からなる。
 露頭観察では正断層を示すR1面が認められる。
 また、最新面にレイク45NEの条線を確認した。

第1.2.3.3.13図 アゴ越付近の破砕部 (AG-2) の露頭写真(1)及びスケッチ

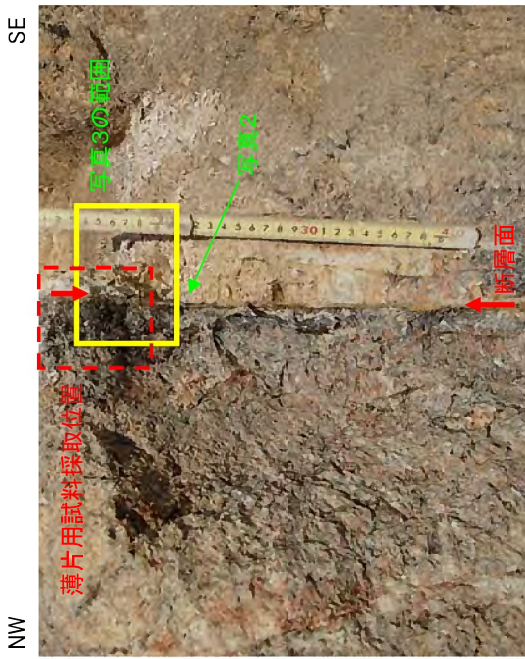


写真1

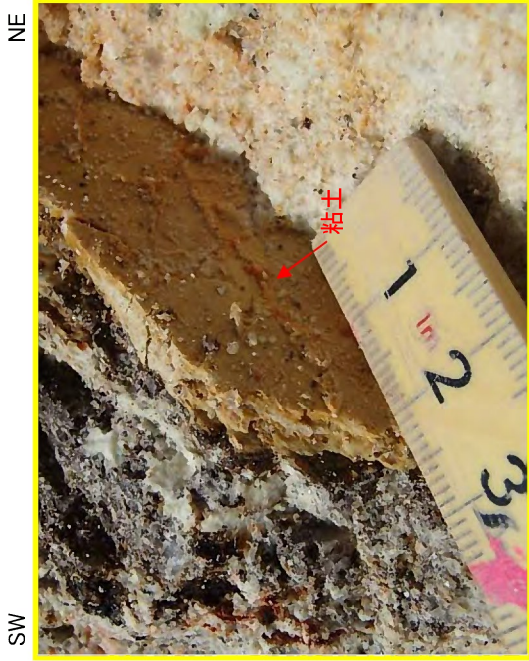


写真2:断層面上に黄褐色の粘土が網目状に発達する。

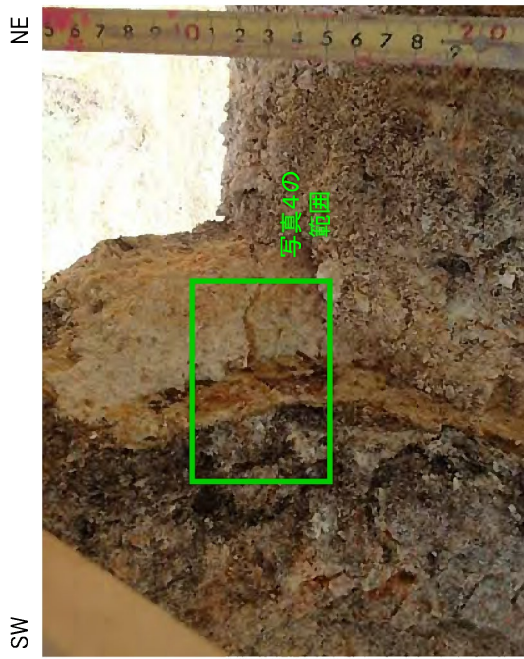


写真3

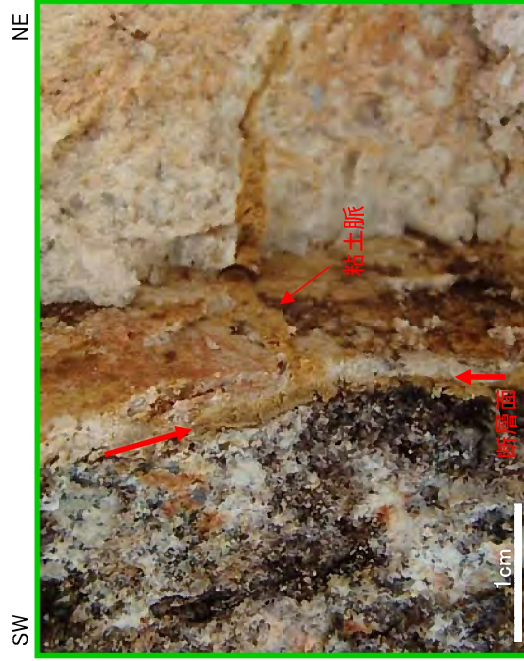


写真4:断層面に直交する方向に粘土脈が分布しており、薄片を作成して、断層面との関係を観察する。

第1.2.3.3.14図 アゴ越付近の破碎部 (AG-2) の露頭写真(2)

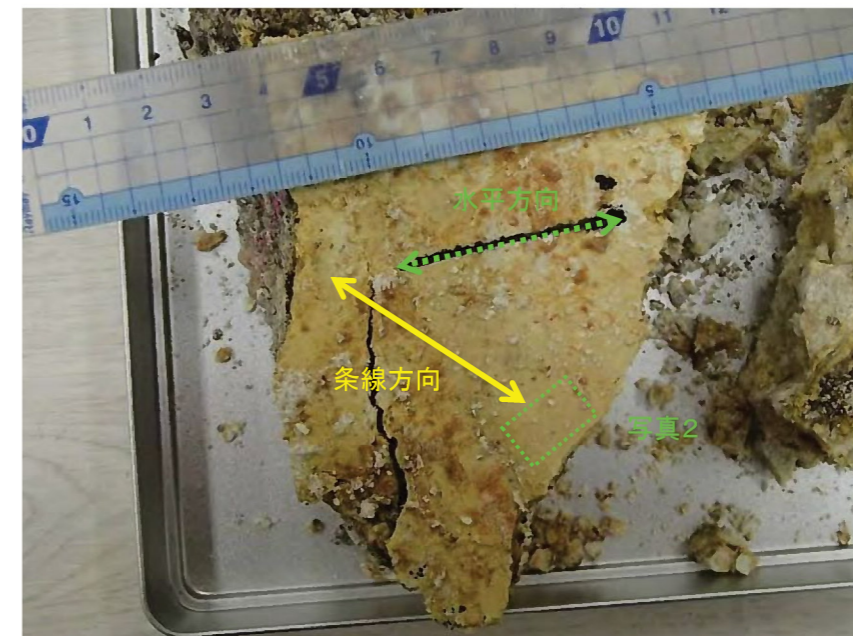
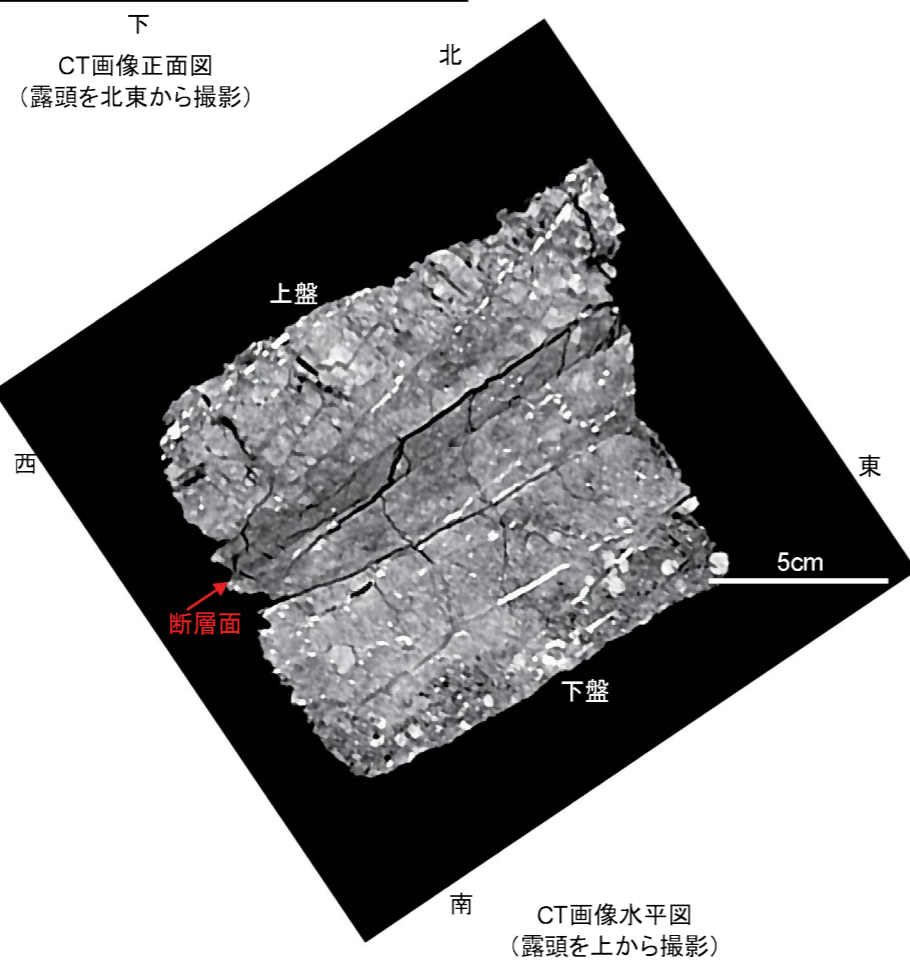
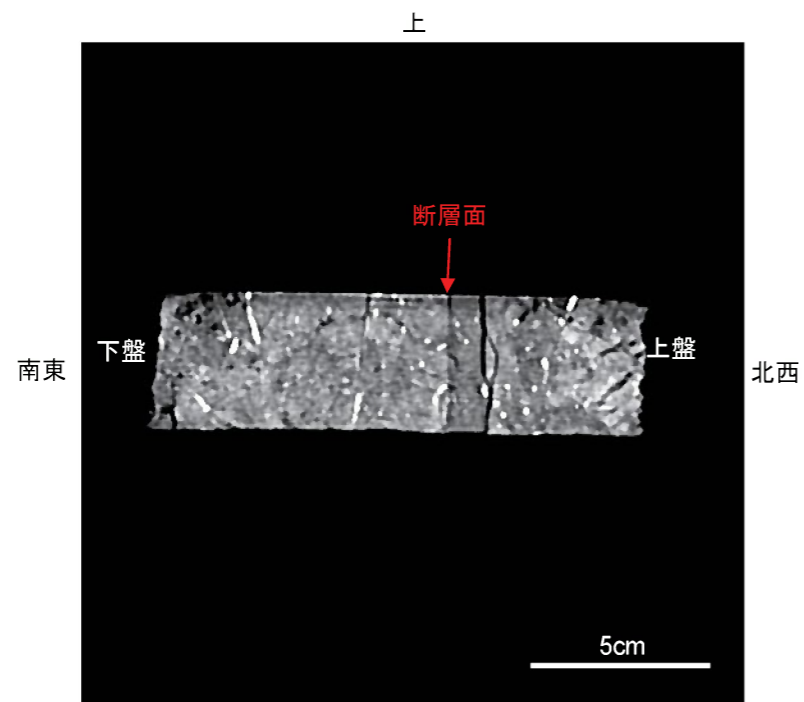


写真1: 条線観察用試料-断層面-上盤下面を観察

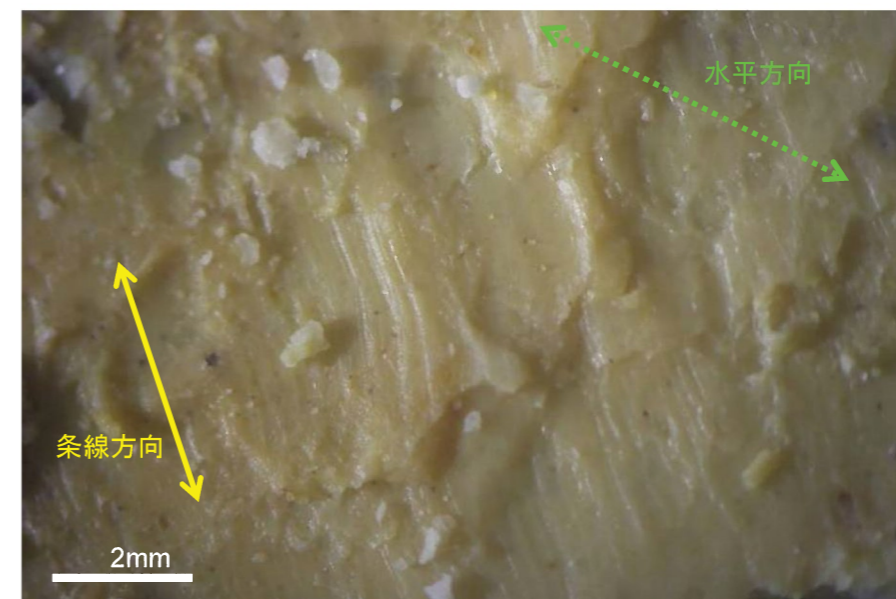
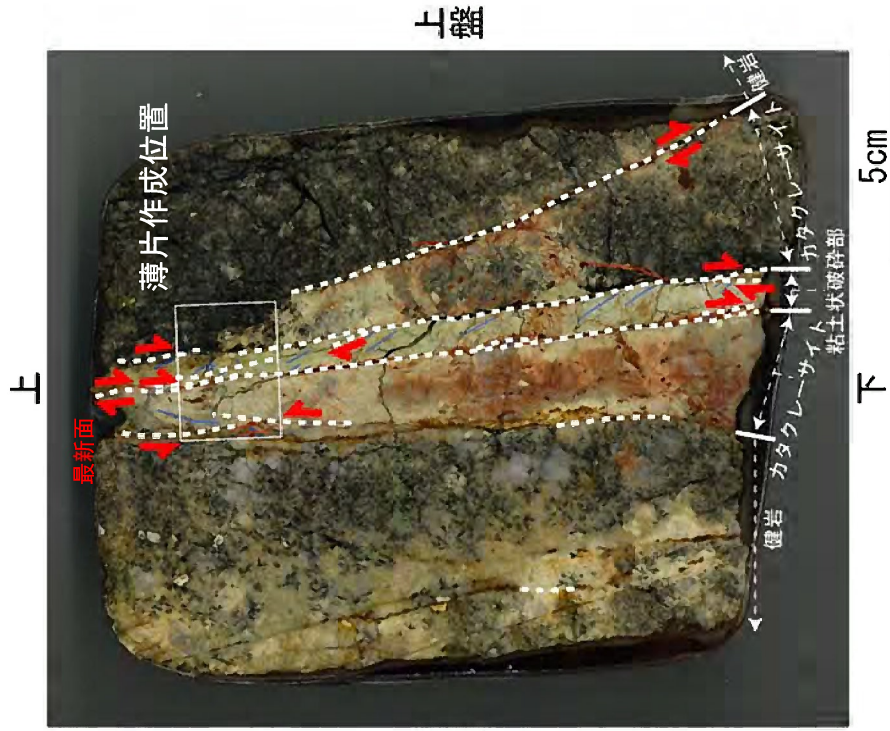


写真2: 上盤下面で観察しているため、復元するとレイク45NEの条線であることがわかる。

断層面の走向/傾斜: N56E/85N。
 縦ずれ成分: 不明、横ずれ成分: 右横ずれ(低密度部)。
 研磨片中に途切れることなく連続するY面が1条認められた。このY面は直線性に優れる。
 さらに、このY面に沿って幅1cm程度の低密度部が認められたことから、このY面が断層面であると考えられる。

第1.2.3.3.15図 アゴ越付近の破碎部 (AG-2) のCT画像観察および条線観察結果



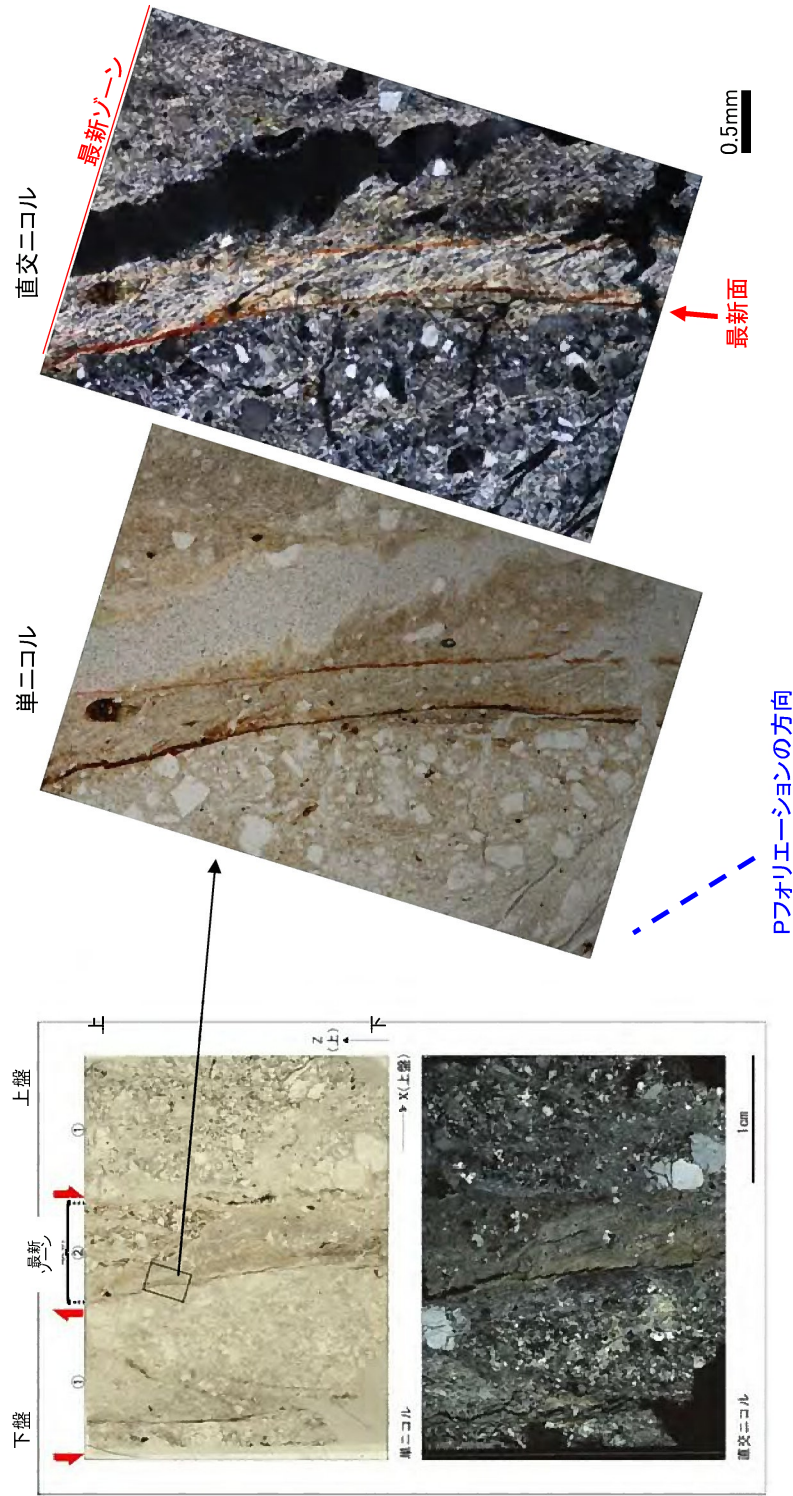
凡例：白破線(断面面)、赤線(R1面)、青線(P面)



研磨片観察結果

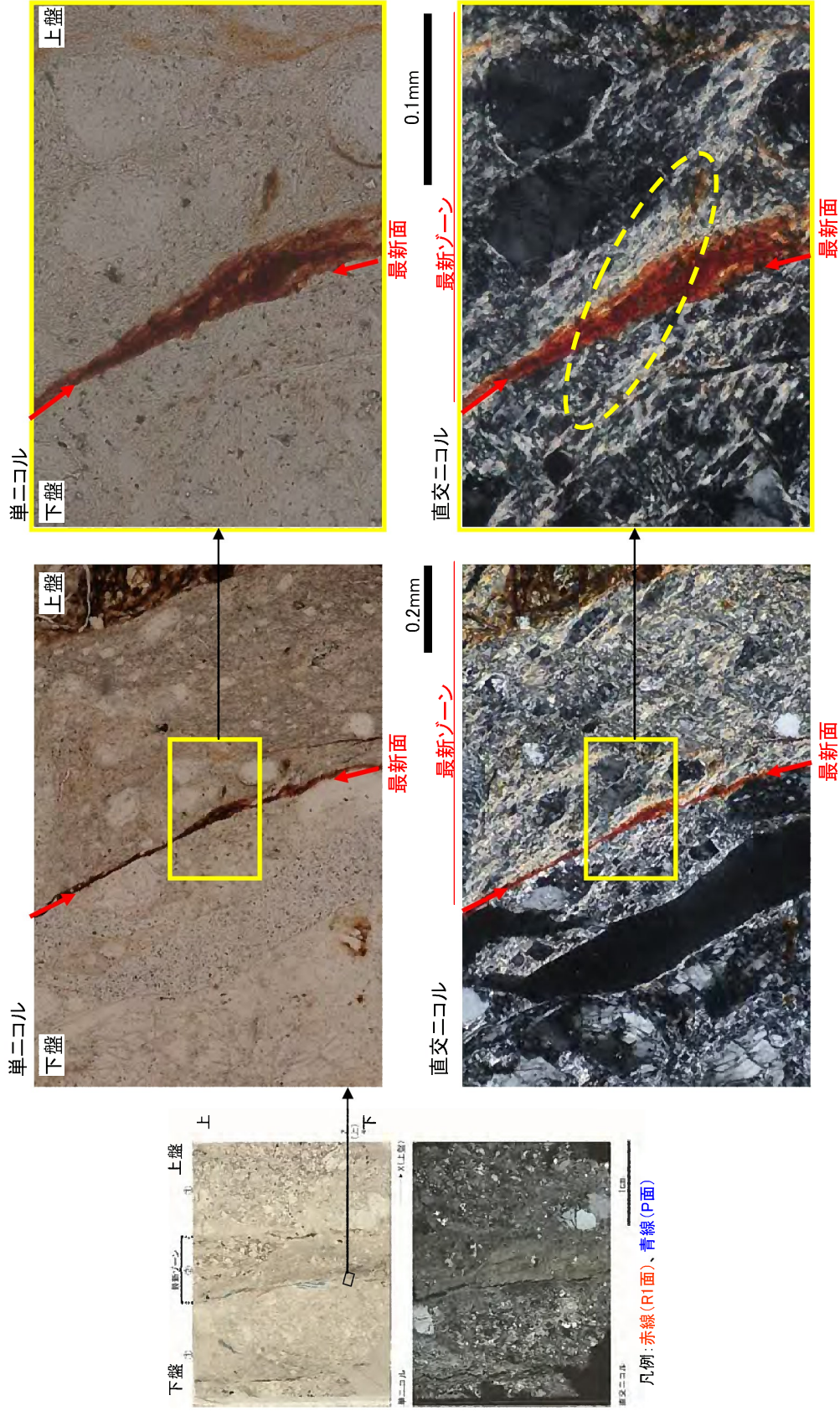
- 分帯：健岩とカタクレーサイト、粘土状破砕部が認められる。
- 粘土状破砕部に沿って、研磨片を横断するY面が1条認められる。さらに、このY面は直線性に優れることから、最新面であると考えられる。最新面は主に粘土状破砕部と下盤側のカタクレーサイトを境界付ける。
- 下盤側のカタクレーサイトに沿って左横ずれを伴う逆断層センスを示す複合面構造が認められる。さらに、最新面に沿う粘土状破砕部中に右横ずれを伴う正断層センスを示す変形指標が認められる。これらのことから、運動センスが左横ずれを伴う逆断層から右横ずれを伴う正断層に反転した可能性がある。

第1.2.3.3.16図 アゴ越付近の破砕部 (AG-2) の研磨片観察結果



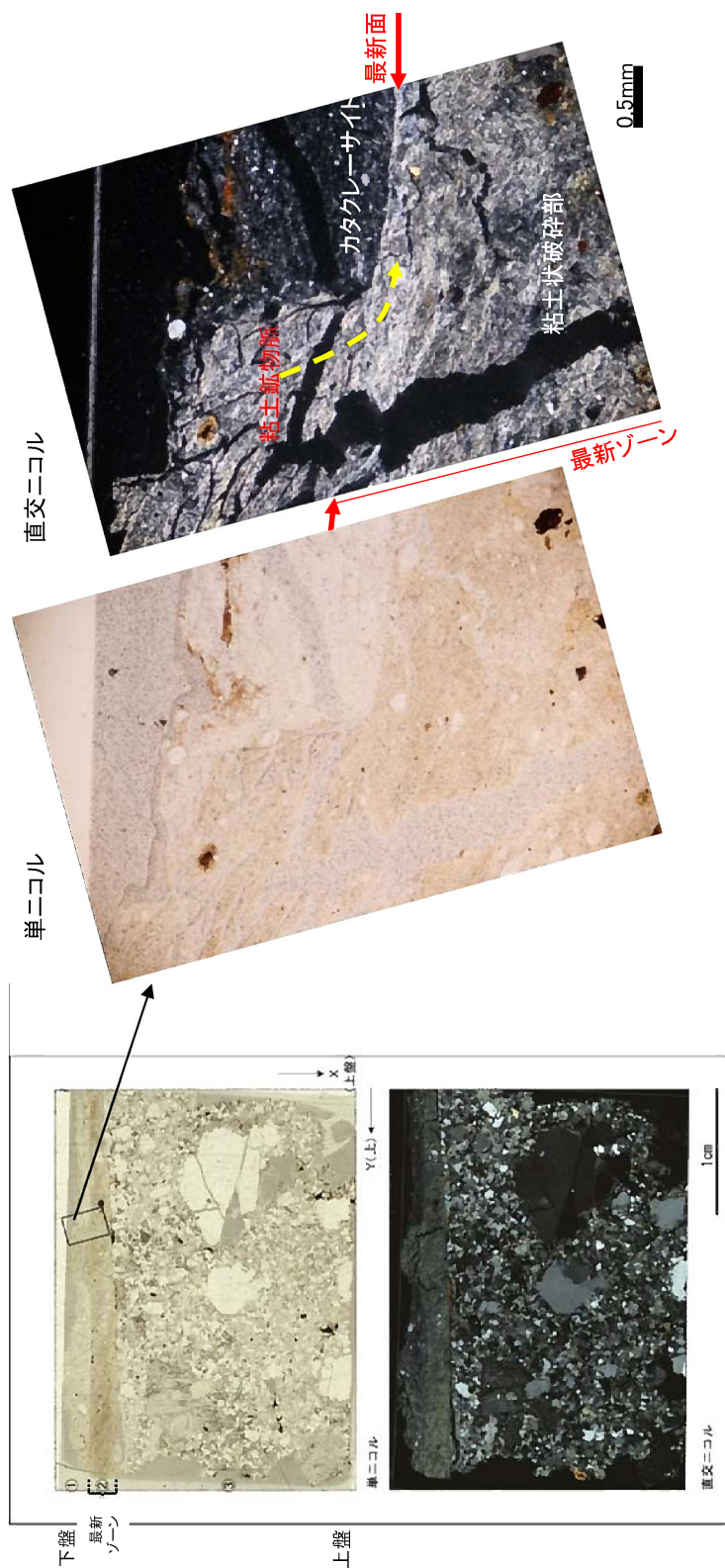
・ 観察の結果、①カタクラレサイト、②粘土状破砕部に分帯される。②が最新ゾーンである。最新面は粘土状破砕部(②)とカタクラレサイト(①)の下盤側境界に位置する。最新ゾーンには層状構造は認められない。
 ・ 最新面に沿う②中に右横ずれを伴う正断層センスを示すPフオリエーションが認められる。
 ・ 断層の走向傾斜がN56E/85N、条線角度が45NEであることから、最新活動は右横ずれを伴う正断層センスである。

第1.2.3.3.17図(1) アゴ越付近の破砕部 (AG-2) の薄片観察結果(1)



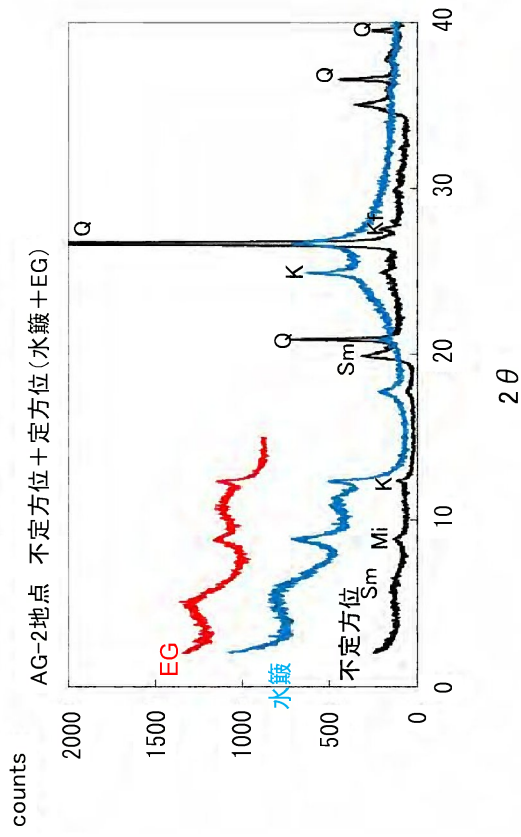
・最新面及びその周辺に粘土鉱物が網目状に発達し、最新面を横断しているものがあり、変形していない。

第1.2.3.3.17図(2) アゴ越付近の破碎部 (AG-2) の薄片観察結果(2)



- ・薄片観察の結果、①カタクレーサイト、②粘土状破砕部、③健岩に分帯される。②が最新ゾーンである。最新面は粘土状破砕部(②)とカタクレーサイト(①)の境界に位置する。最新ゾーンでは層状構造が認められない。
- ・最新面が粘土鉱物で充填され不明瞭になっている。
- ・カタクレーサイトを横断し、さらに最新面を横断して粘土状破砕部に入り込んでいる粘土鉱物脈が認められる。

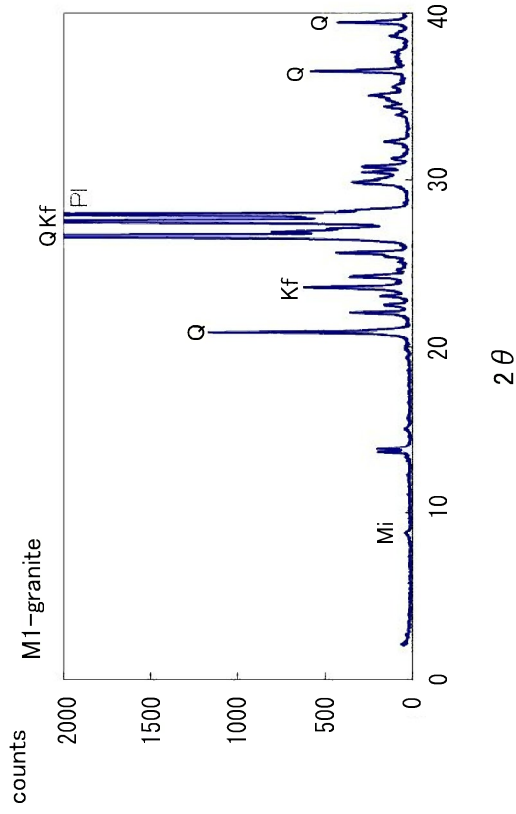
第1.2.3.3.17図(3) アゴ越付近の破砕部 (AG-2) の薄片観察結果(3)



アゴ越 (AG-2) 破砕部のチャート

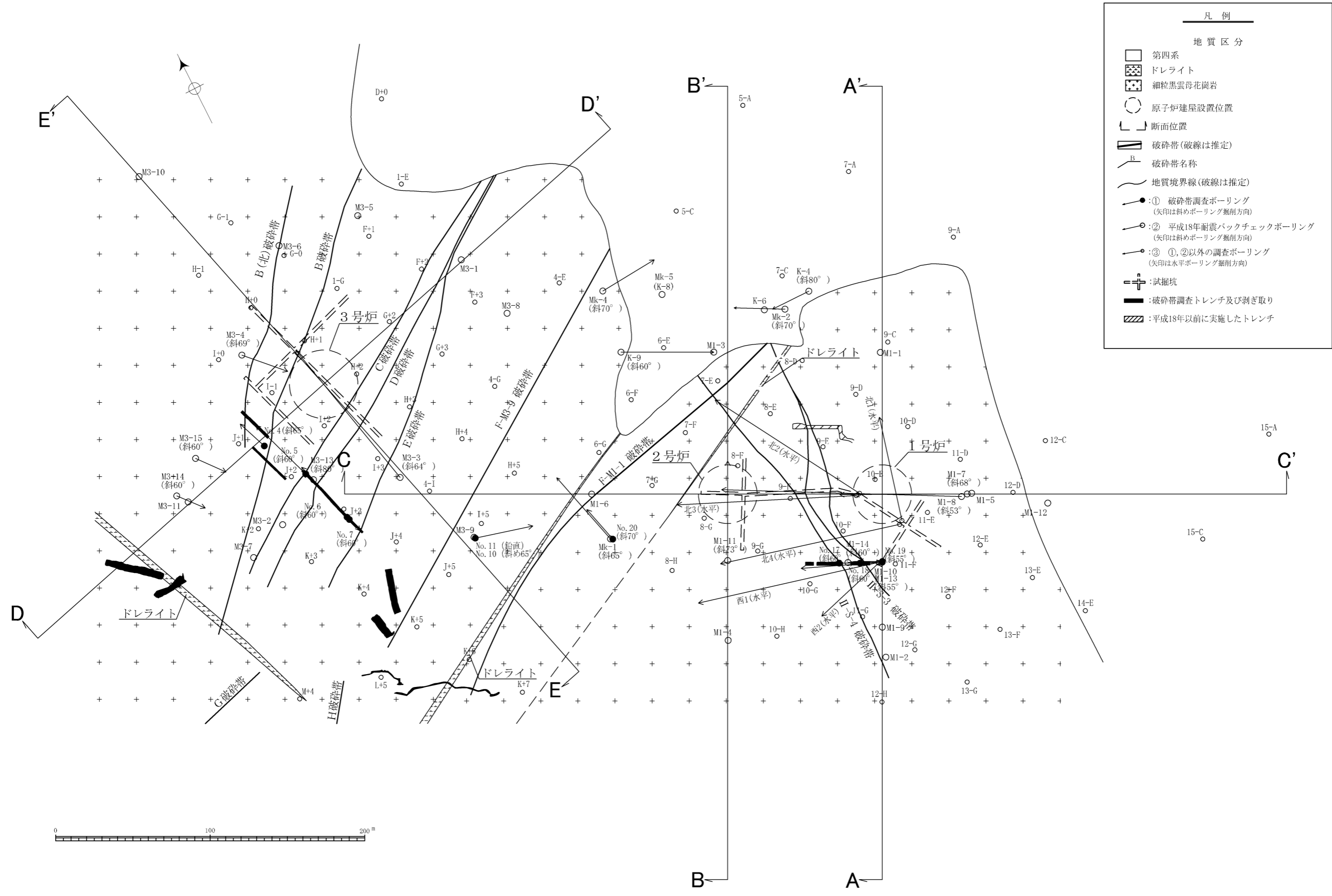
水鏡及びEG処理を施した試料の回折パターンは、見やすくするため不定方位の回折パターンの上方に表示した。

AG-2破砕部は、新鮮花崗岩と比べ斜長石やカリ長石の割合が小さくなっている。一方、AG-2破砕部はスメクタイト、雲母粘土鉱物、カオリン鉱物が生成している。よって、AG-2破砕部は熱水変質作用を受けていると判断される。



新鮮な花崗岩のチャート

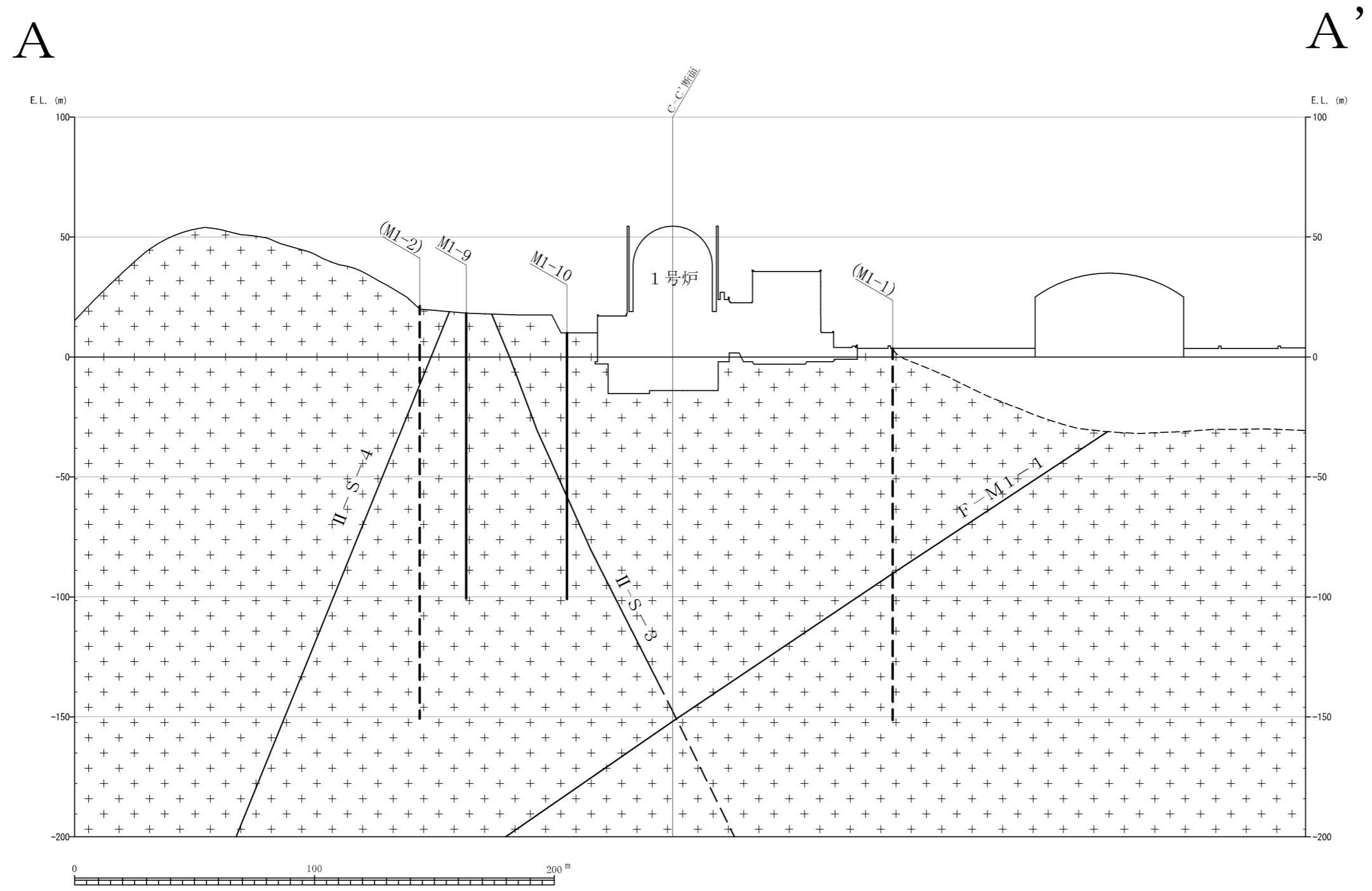
記号凡例
 Q: 石英
 Pl: 斜長石
 Kf: カリ長石
 Sm: スメクタイト
 Mi: 雲母粘土鉱物
 K: カオリン鉱物



第1.2.3.4.1図(1) 地質水平断面図 (E.L.-20m)



第1.2.3.4.1図(2) 地質水平断面図 (E.L.+0m)



凡 例

地質区分

- 堆積物・埋め戻し土等
- ドレライト
- 細粒黒雲母花崗岩
- 地質境界線
- 破碎帯 (破線は破碎部なし)

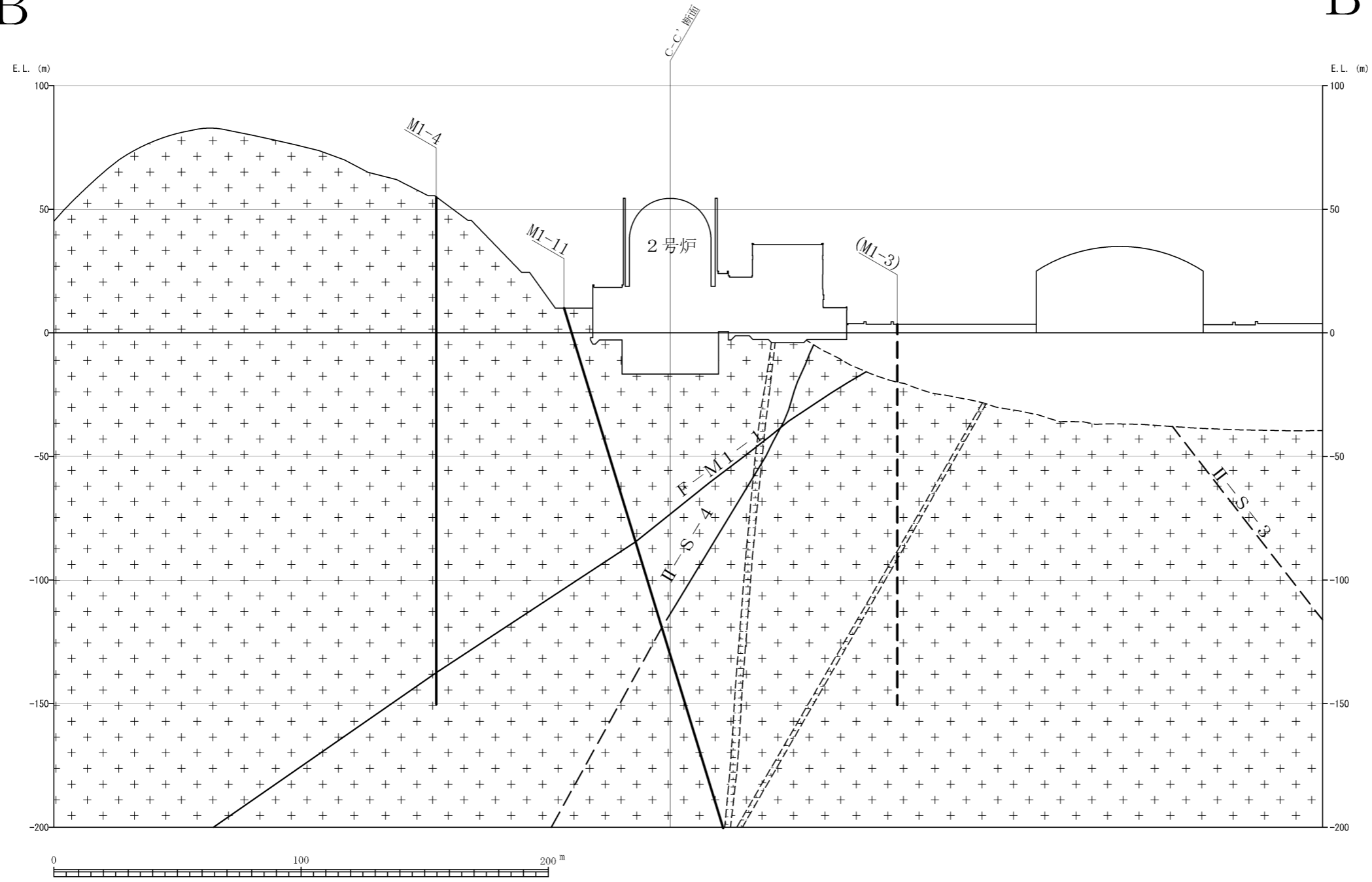
M1-10
|
————— ボーリング位置

※投影表示しているボーリングは、
ボーリング位置を破線で表示し、
孔名に()を付す。

第1.2.3.4.2図(1) 地質鉛直断面図 (A-A'断面)






B

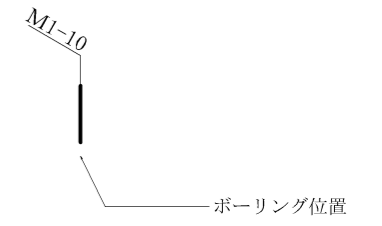
B'



凡例

地質区分

-  堆積物・埋め戻し土等
-  ドレライト
-  細粒黒雲母花崗岩
-  地質境界線
-  破碎帯 (破線は破碎部なし)



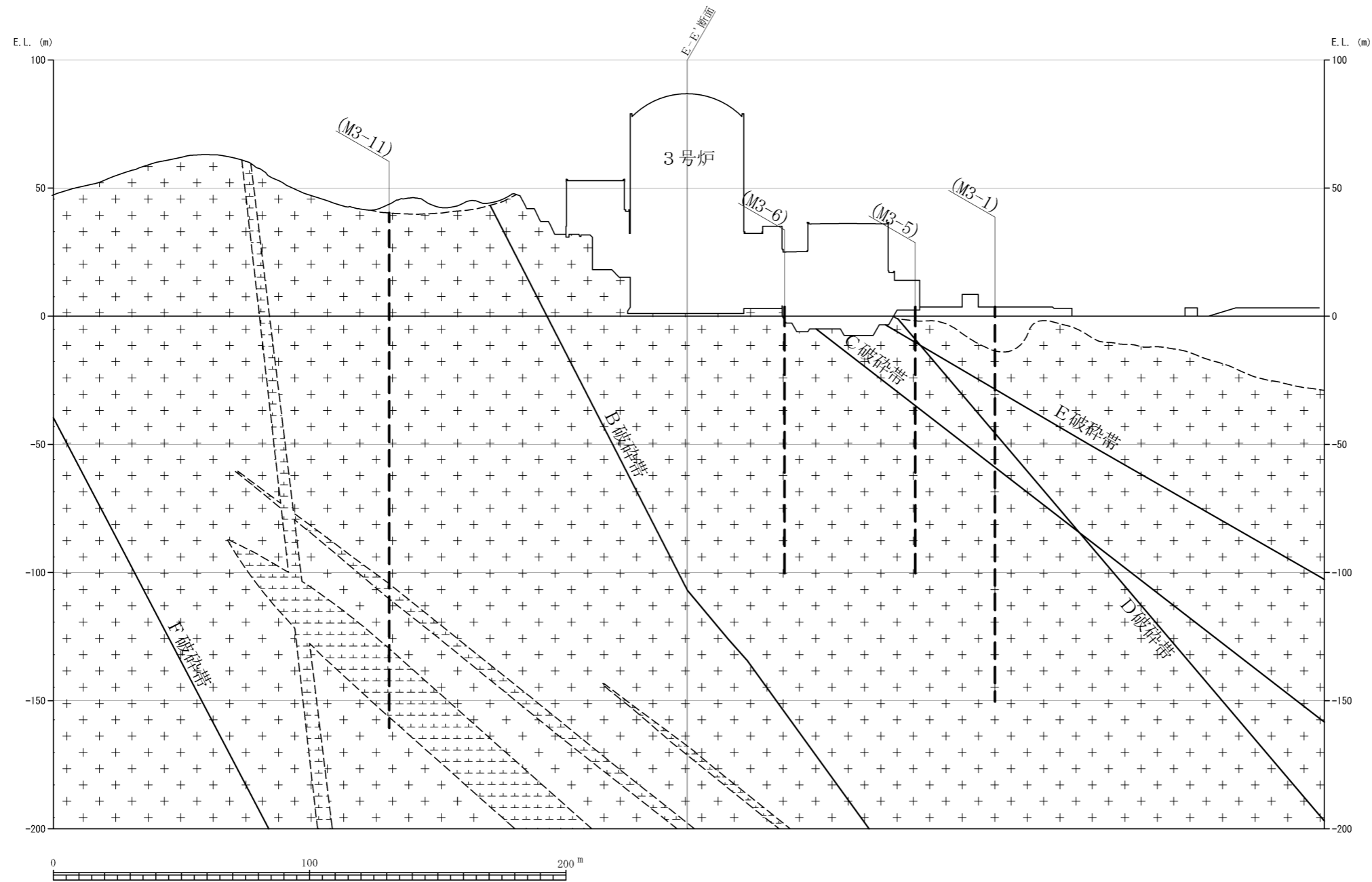
第1.2.3.4.2図(2) 地質鉛直断面図 (B-B'断面)



第1.2.3.4.2図(3) 地質鉛直断面図 (C・C'断面)




D



D'

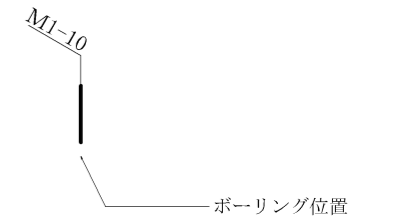


凡例

地質区分

-  堆積物・埋め戻し土等
-  ドレライト
-  細粒黒雲母花崗岩

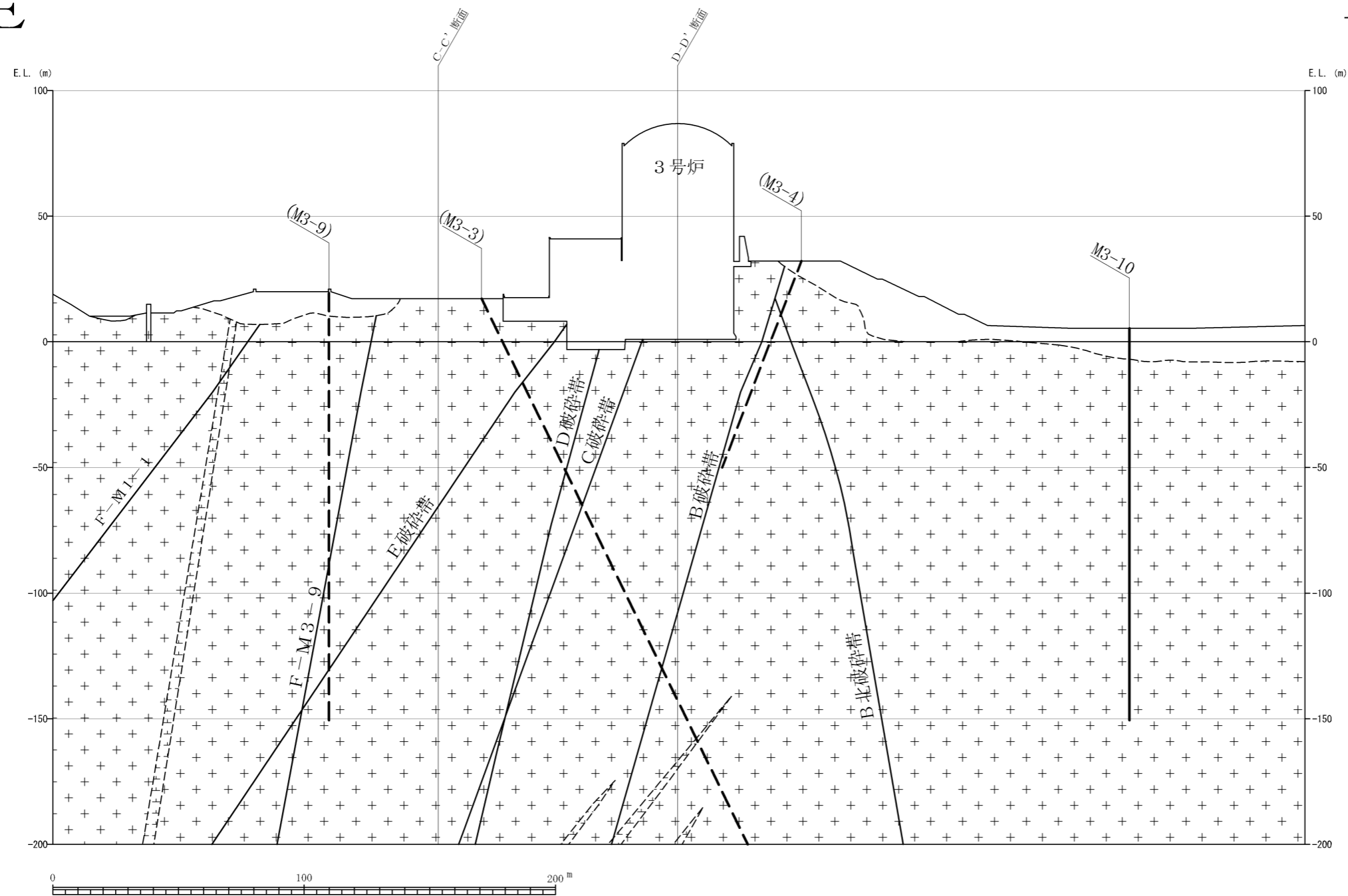
-  地質境界線
-  破碎帯



第1.2.3.4.2図(4) 地質鉛直断面図 (D-D'断面)

E

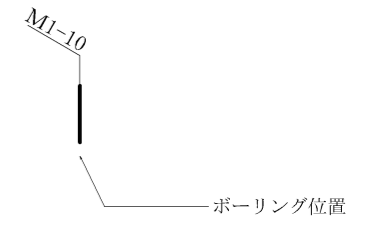
E'



凡例

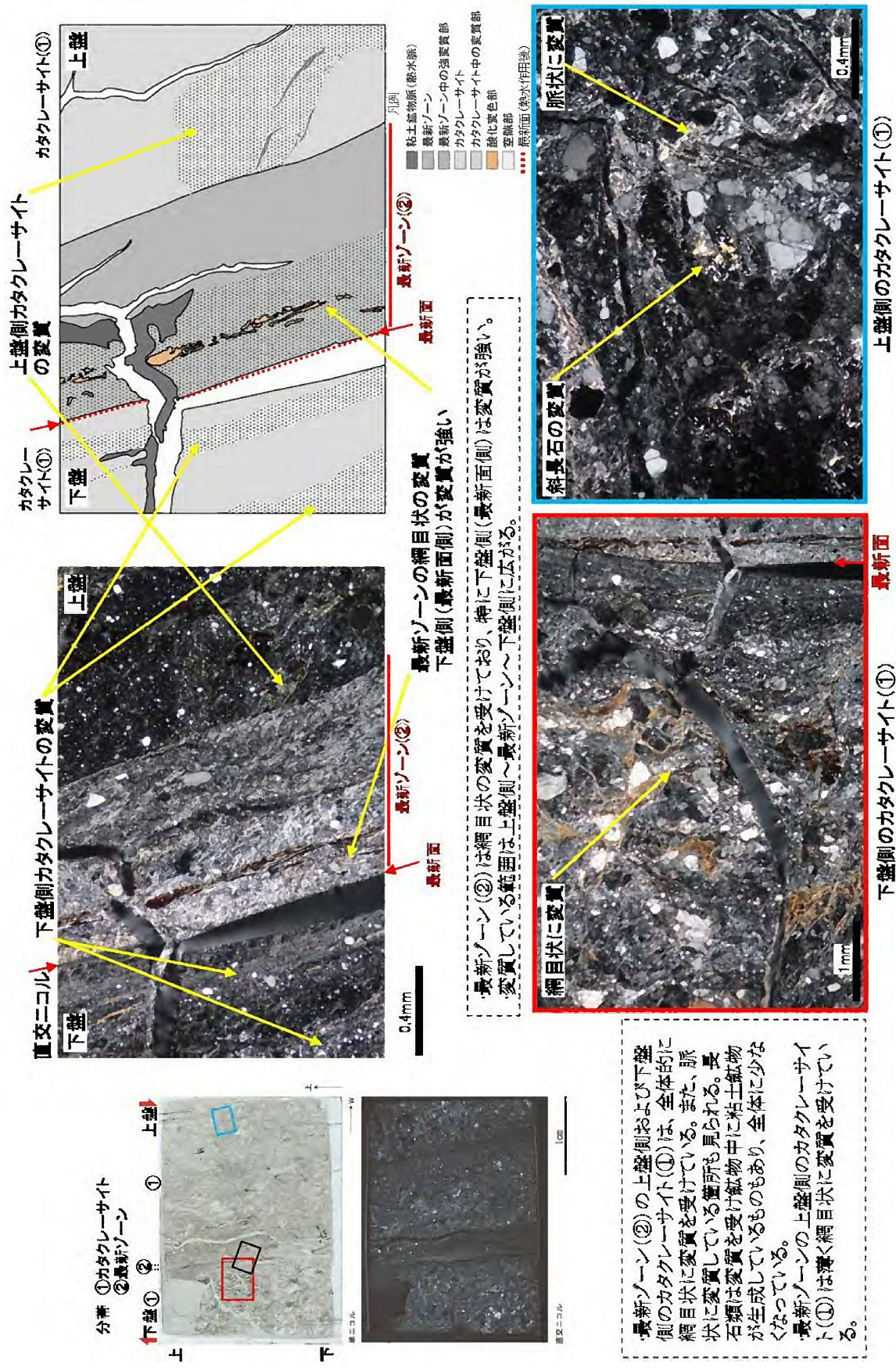
地質区分

- 堆積物・埋め戻し土等
- ドレライト
- 細粒黒雲母花崗岩
- 地質境界線
- 破碎帯



※投影表示しているボーリングは、
ボーリング位置を破線で表示し、
孔名に()を付す。

第1.2.3.4.2図(5) 地質鉛直断面図 (E-E'断面)

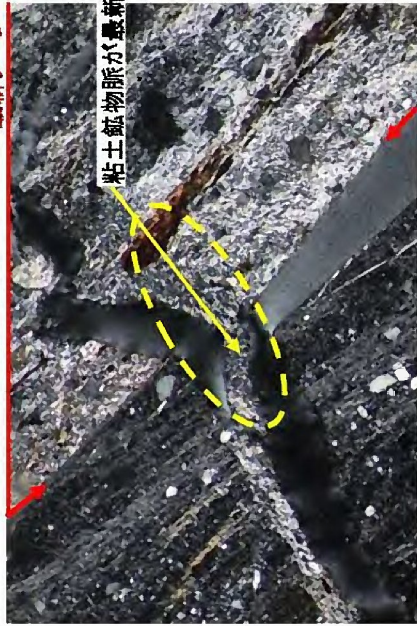


・薄片観察で認められた性状から、破砕部およびその近傍ほど強く熱水変質を受けていることが認められる。

第1.2.3.4.5図(1) 破砕部の薄片観察結果(1)

最新ゾーン

上盤側



直交ニコル

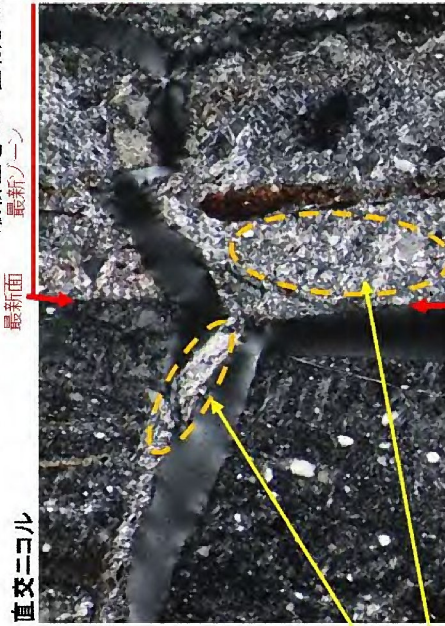
分帯 ①カタクレーサイト
②最新ゾーン



下盤側

最新面を45°回転させた写真

直交ニコル



直交ニコル

粘土鉱物が網目状に発達し
明るい帯状の組織をなす

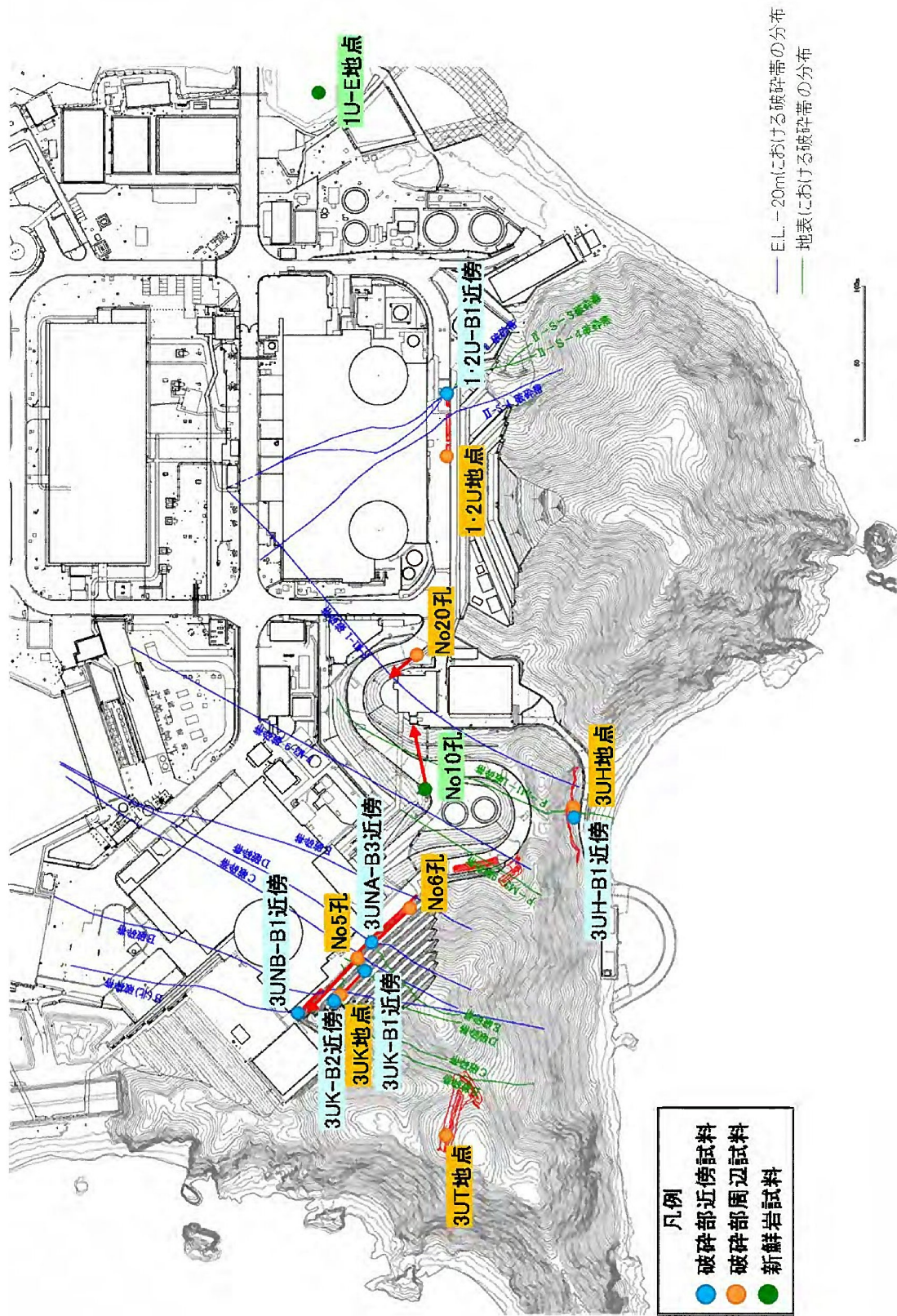
粘土鉱物が網目状に発達し
幅の広い明るい帯状の組織をなす

最新面が上下方向に延びる場合の写真

最新面を90°回転させた写真

最新面を横断する粘土鉱物脈は、最新ゾーンから連続している。
 ・最新面を横断する粘土鉱物脈は、最新ゾーンの粘土鉱物と同様に直交ニコルでは、微細で明るい白色を呈する粘土鉱物からなり、光学特性に差が認められない。
 ・また、最新ゾーンおよび最新面を横断する粘土鉱物脈の粘土鉱物粒子は、いずれも微細で鏡下では認識できず、粘土鉱物脈は明るい白色を呈する粘土鉱物の
 密集で形成されており、密集した粘土鉱物は網目状に発達し、分帯は認められない。

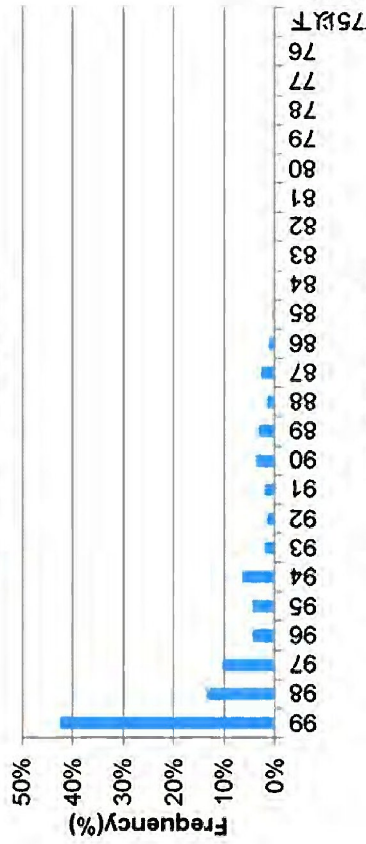
・最新ゾーンと最新面を横断する粘土鉱物脈は、顕微鏡下では光学特性に差が認められず、組織も類似しているため、同一の鉱物群で構成されていると評価する。



試料採取位置図

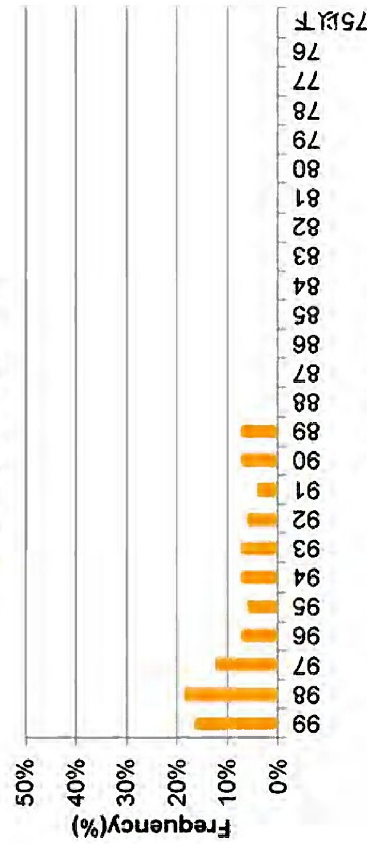
第1.2.3.4.7図(1) 長石類のEPMA分析(1)

■ 破砕部近傍試料(N=186)



■ 破砕部近傍試料のアルバイト率
アルバイト率 (mol.%)

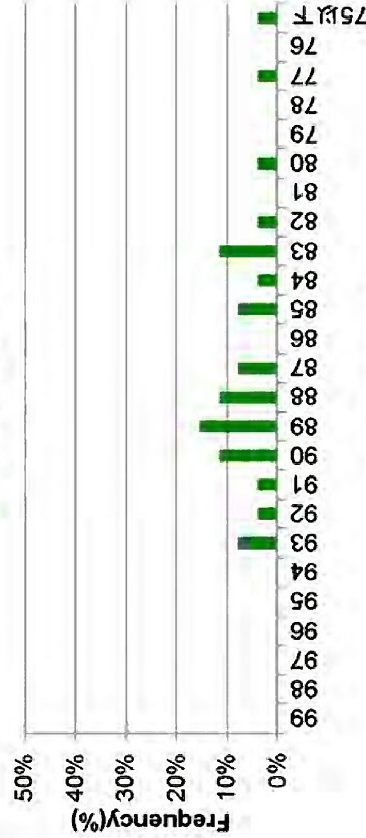
■ 破砕部周辺試料(N=97)



■ 破砕部周辺試料のアルバイト率
アルバイト率 (mol.%)

・破砕部近傍および周辺は、母岩と比較してアルバイト率が大きいことから熱水変質を受けて曹長石化したと判断される。
 ・破砕部近傍試料のアルバイト率が最も大きく破砕帯に近いほど曹長石化の程度が強くなっていくことから、破砕帯を中心に熱水変質の影響があったと考えられる。

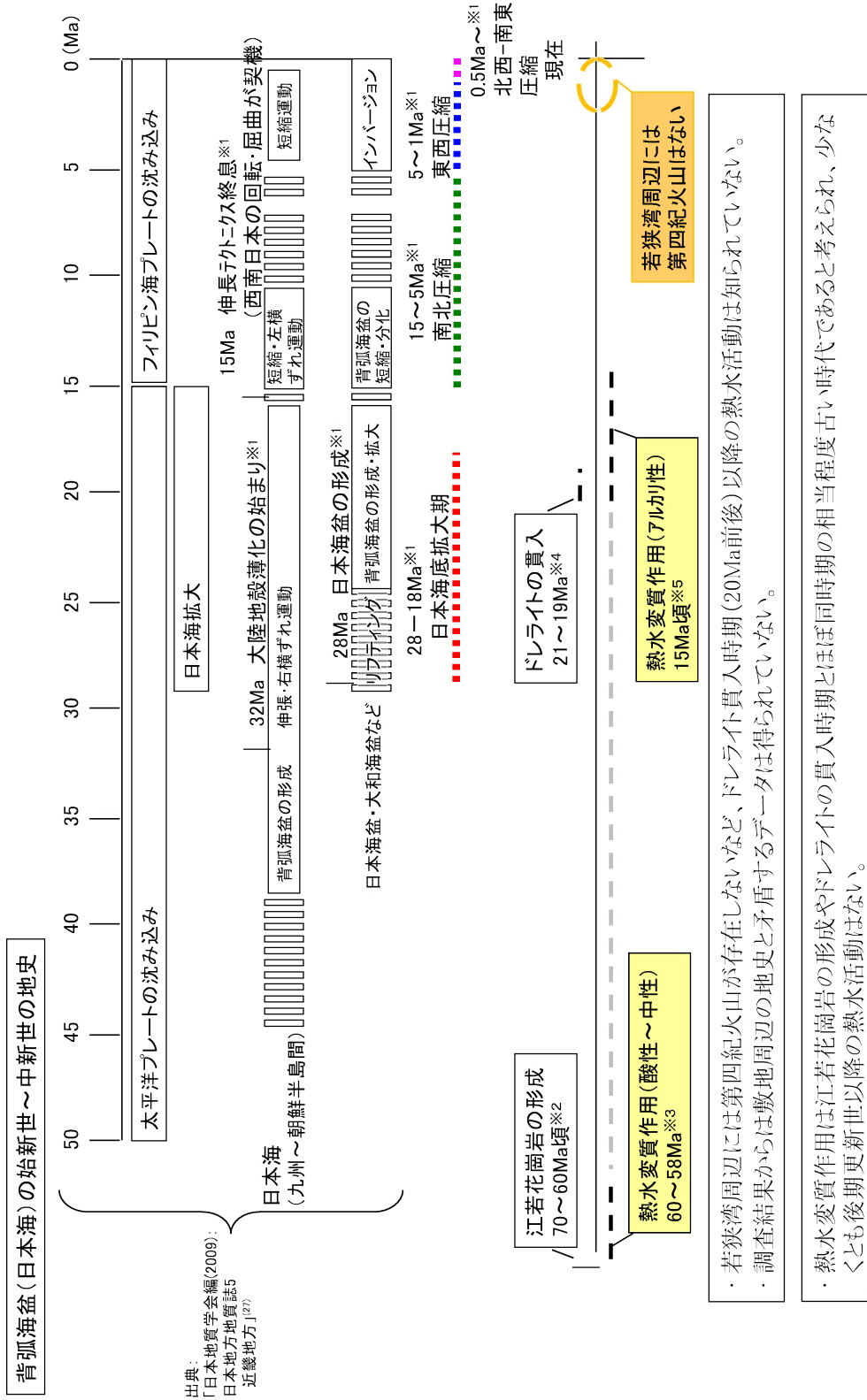
■ 新鮮岩試料(N=26)



■ 新鮮岩試料のアルバイト率
アルバイト率 (mol.%)

・破砕部近傍試料および破砕部周辺試料は、母岩と比較してアルバイト率が大きい。
 ・破砕部近傍試料および破砕部周辺試料を比較すると、破砕部近傍試料の方がアルバイト率が高い。

敷地周辺の地史と敷地内の地質年代との関係



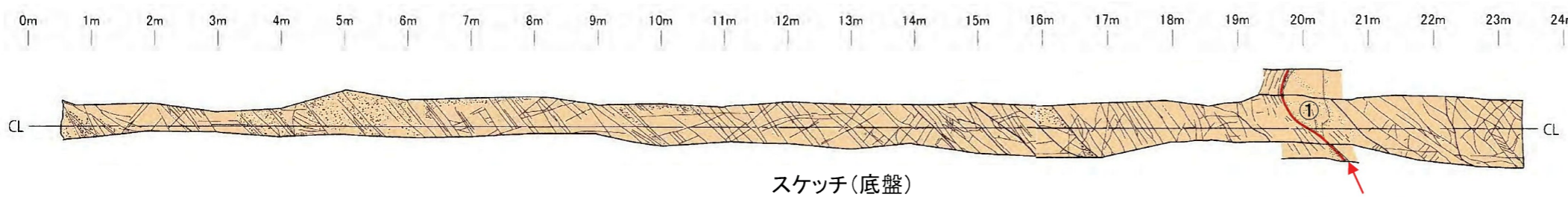
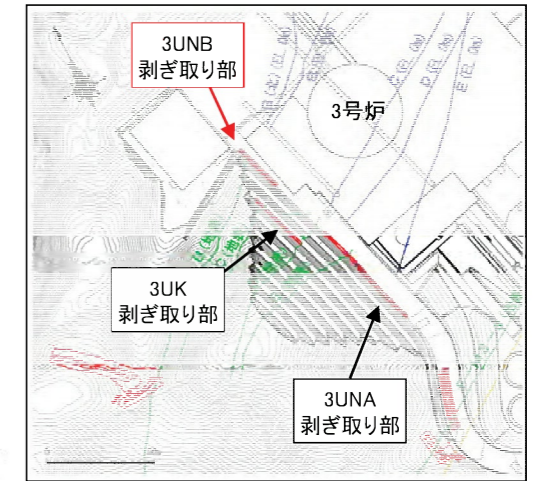
・若狭湾周辺には第四紀火山が存在しないなど、ドレライト貫入時期(20Ma前後)以降の熱水活動は知られていない。
 ・調査結果からは敷地周辺の地史と矛盾するデータは得られていない。

・熱水変質作用は江若花崗岩の形成やドレライトの貫入時期とほぼ同時期の相当程度古い時代であると考えられ、少なくとも後期更新世以降の熱水活動はない。

※1 竹内(2010)²⁸⁾より引用
 ※2 栗本他(1999)²⁹⁾による黒雲母花崗岩のK-Ar測定値 62.9 ± 3.1 Ma、当社が実施した花崗岩のK-Ar測定値 $64.0 \pm 1.8 \sim 64.9 \pm 1.8$ Ma、FT(ジルコニウム)測定値 67.8 ± 0.9 Ma
 ※3 1-2U-B1、3UNB-B1熱水変質深處石英の雲母粘土鉱物のK-Ar年代測定値
 ※4 梅田他(2013)³⁰⁾による放射能素研敷地内のドレライトのK-Ar年代測定値は約21Ma、高濃縮型原形も同じ敷地内のドレライトのK-Ar年代測定値は約19Ma、美波発電所敷地内のドレライトのK-Ar年代測定値は約19Ma
 ※5 敷地前海岸のドレライト露頭のK-Ar年代測定値

第1.2.3.4.8図 敷地周辺の地史と敷地内の地質年代との関係

3号炉付近 剥ぎ取り調査結果(3UNB)

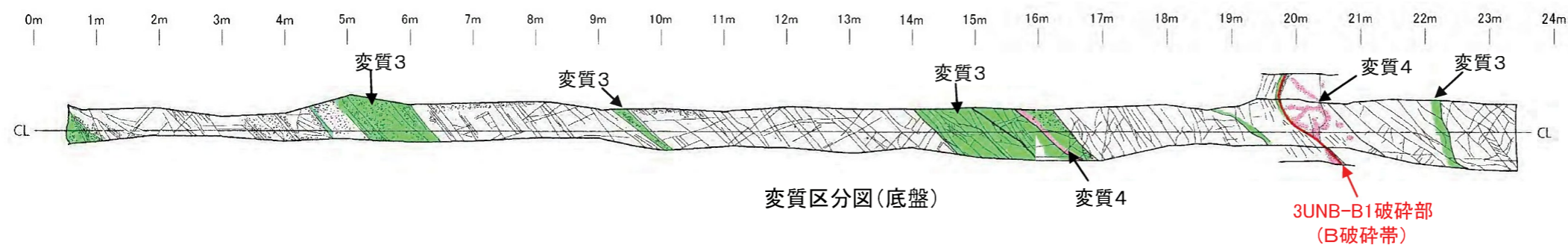


スケッチの凡例

| | |
|----|---------|
| | 細粒花崗岩 |
| CL | 剥ぎ取り中心線 |

変質の凡例

| 区分 | 色 | 性状 |
|-----|---|--|
| 変質1 | | 全く変質していないか、わずかに変質している可能性がある程度。 |
| 変質2 | | 原岩組織を残し、弱く褐色している程度。長石の変質(濃褐色化)、割れ目に沿って粘土化が認められるが、岩塊部の粒子の結合は保たれている。 |
| 変質3 | | 原岩組織を残すが、長石の強い変質(濃褐色化)、あるいは露頭全体の褐色が見られ粒子の結合が弱くなっている。 |
| 変質4 | | 納豆状に細かく白色粘土を介在する。原岩組織を残さず岩石全体が粘土化している。あるいは凝化している。 |



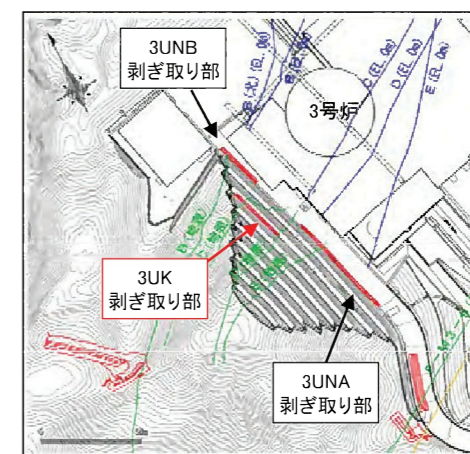
破碎幅が2cm以上あり、粘土状破碎幅が1cm以上ある破碎部を抽出
剥ぎ取り箇所①(3UNB-B1破碎部)を破碎部として抽出

- ・ 3UNB-B1破碎部

走向傾斜: N33E/70S
破碎幅は2cm~7cm、粘土状破碎部の幅は0.1cm~1cm程度、赤褐~褐色粘土

B破碎帯と走向・傾斜なども調和的な3UNB-B1破碎部を確認した。
3UNB剥ぎ取りは全体に変質が弱く変質2から変質3を呈する。3UNB-B1破碎部周辺で変質が強く、変質区分は変質4もしくは変質3を呈する。

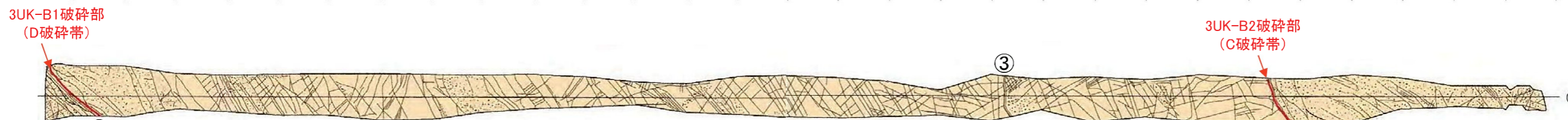
3号炉付近 剥ぎ取り調査結果(3UK)



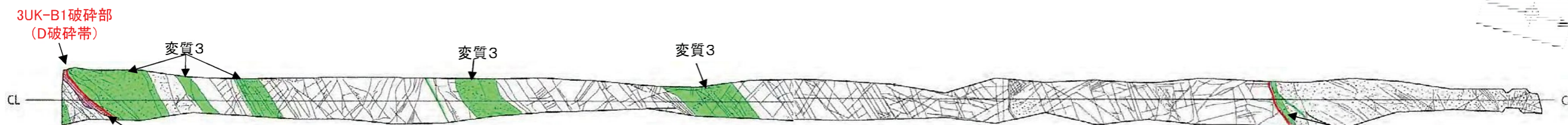
調査位置図



写真(底盤)



スケッチ(底盤)



変質区分図(底盤)

破砕幅が2cm以上あり、粘土状破砕幅が1cm以上ある破砕部を抽出
 上図スケッチで2箇所(①、②)を抽出
 なお③(走向傾斜N50E/65S)は幅1cm~4cmであるが、粘土混じり角礫状で粘土状破砕部を伴わないことから、抽出対象から除外
 以上から
 ①:3UK-B1破砕部
 ②:3UK-B2破砕部
 を破砕部として抽出

- 3UK-B1破砕部
 走向傾斜:N20E/62SE
 破砕幅は0.1cm~2cm、白色~黄褐色粘土状破砕部からなる
- 3UK-B2破砕部
 走向傾斜:N43E/52S
 破砕幅は0.5cm~2cm程度、黄灰色~褐色粘土状破砕部からなる

スケッチの凡例

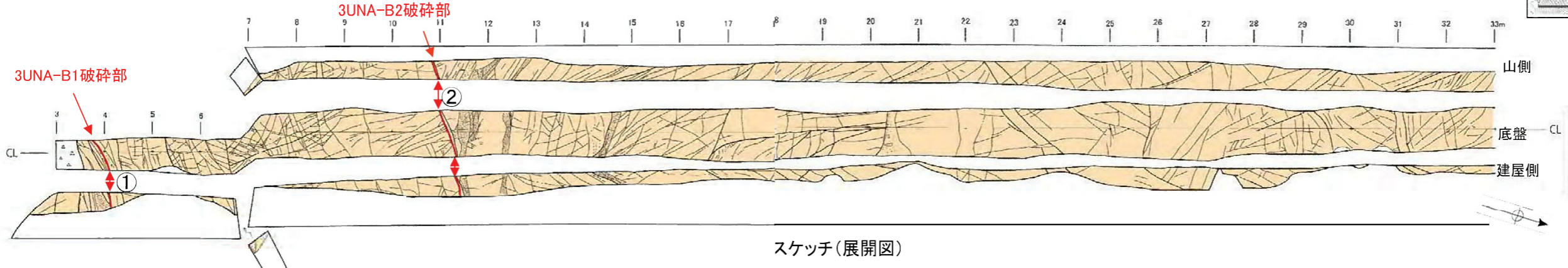
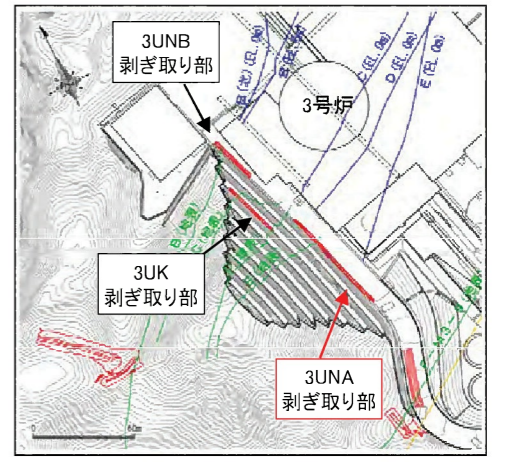
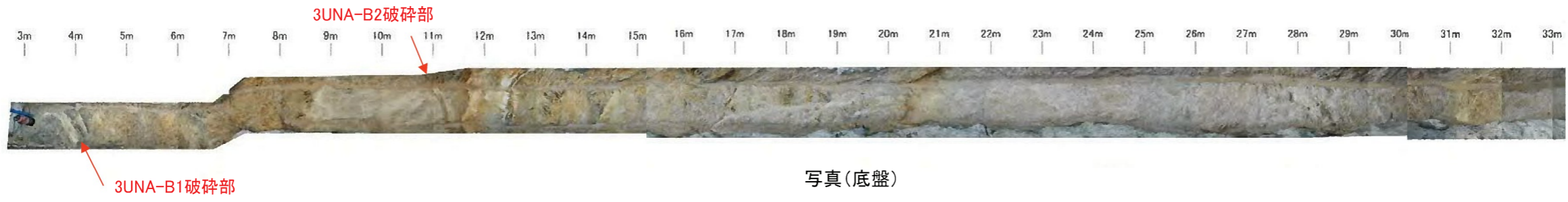
- 細粒花崗岩 (Yellow box)
- 剥ぎ取り中心線 (CL - Red line)

変質の凡例

| 区分 | 色 | 性状 |
|-----|----|---|
| 変質1 | 白 | 全く変質していないか、わずかに変質している可能性がある程度。 |
| 変質2 | 淡黄 | 原岩組織を残し、弱く着色している程度。 長石の変質(淡褐色化)、磨れ目によって粘土化が認められるが、岩塊部の粒子の結合は保たれている。 |
| 変質3 | 黄 | 原岩組織を残すが、長石の強い変質(濃褐色化)、あるいは露頭全体の脱色が見られ粒子の結合が弱くなっている。 細目状に細かく白色粘土を含有する。 |
| 変質4 | 赤 | 原岩組織を残さず長石全体が粘土化している。 あるいは珪化している。 |

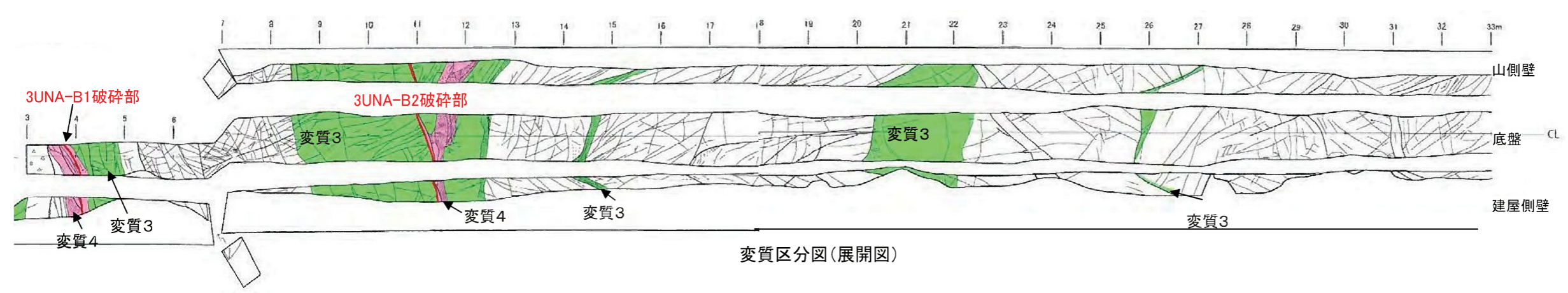
• C破砕帯と走向・傾斜なども調和的な3UK-B2破砕部を確認した。
 • D破砕帯と走向・傾斜なども調和的な3UK-B1破砕部を確認した。
 • 3UK剥ぎ取りは全体に変質が弱く変質2から変質3を呈する。3UK-B1及び3UK-B2破砕部周辺で変質が強く、変質区分は変質4もしくは変質3を呈する。

3号炉付近 剥ぎ取り調査結果(3UNA) (東側)



スケッチの凡例

| | |
|----|---------|
| | 細粒花崗岩 |
| CL | 剥ぎ取り中心線 |



変質の凡例

| 区分 | 色 | 性状 |
|-----|---|---|
| 変質1 | | 全く変質していないか、わずかに変質している可能性がある程度。 |
| 変質2 | | 原岩組織を残し、弱く脱色している程度。 集石の変質(淡褐色化) 剥れ目に出て粘土化が認められるが、岩塊部の粒子の結合は保たれている。 |
| 変質3 | | 原岩組織を残すが、集石の強い変質(濃褐色化) あるいは集石全体の脱色が見られ粒子の結合が弱くなっている。 剥目状に細かく白色粘土を介在する。 |
| 変質4 | | 原岩組織を残さず集石全体が粘土化している。 あるいは陸化している。 |

破碎幅が2cm以上あり、粘土状破碎幅が1cm以上ある破碎部を抽出
剥ぎ取り露頭で2箇所を抽出
(①、②の2箇所)
①:3UNA-B1破碎部
②:3UNA-B2破碎部
を破碎部として抽出

・3UNA-B1破碎部
走向傾斜:N43E/74NW
・破碎幅は1cm~15cm、粘土状破碎部の幅は0.5cm~2cm程度、茶色~黒褐色粘土
・3UNA-B2破碎部
走向傾斜:N47E/86W
破碎幅は1cm~10cm、粘土状破碎部の幅は1cm~3cm、暗褐色粘土

・剥ぎ取り区間は全体に変質を受け白色化している。
・3UNA剥ぎ取りは破碎部周辺で変質が強く、変質区分は変質3から4を呈する。破碎部から離れると変質は弱くなり広く変質2を呈する。